
トラベル・トラブル

藤田文人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラベル・トラブル

【Nコード】

N3966A

【作者名】

藤田文人

【あらすじ】

連絡の途絶えていた友人からの久方振りの電話。話の流れから大樹は遠く離れた友人に会いに行く。再会を果たした大樹に待ち受けるものとは……。自叙伝的旅情シリーズ第二弾。今回はフィクションです。

1、俺ステータス公開（前書き）

他の連載があるのに新連載。自分の首を絞めてる様な気がします。現代モノのお話を書く事にしました。

物語は実際に行った首都旅行をベースに展開しますが、作中の人物はすべて構想中の物語のキャラです。よって彼等の紹介も兼ねてる宣伝小説という意味もあります。小説というよりは自叙伝に近い旅情シリーズ・第二弾、スタートです>（――）<

1、俺ステータス公開

12月にもなると寒さは一段と厳しさを増し、本格的に雪も降り始めて“冬”というものを痛烈に感じさせてくれる。

寒さに滅法弱い俺にとってこの季節、マジ冬眠できたらいいのに……と真剣に考える時がたまにあったりする。

もしゲームみたいに俺のステータス表示が見れるなら『寒さ×』があるのは間違いないだろう。

ああ、何故にそんなバッドステータスを持つ俺が北国に住んでいるのか。俺七不思議のひとつに上げたいくらいだ……。

俺の名前は浜名大樹^{はまなひろき}、三十路一步手前の29才。いわゆる“ギリギリの男”だ。何がギリギリかというところと若者とおじさんの呼び方だな。実際、何の基準で呼び方が変わるかよくわからないけど。

職業はスーパーの店員。

配属先は鮮魚部……俗にいう魚屋さん。毎日魚を調理しているため包丁捌きだけはプロ並みになった。だからといって料理が得意ってわけではない。俺がやっているのはあくまで『下拵え』であって、それを買って実際に料理するのはお客さん……調理と料理ではその意味が違うのだ、少なくともウチの店では。

そんな俺は見渡す限り田んぼが広がる田舎町に住んでいる。田舎、といっても電車で10分もあれば街に出られるので地理的に言えば田舎じゃないんだろうが、駅周辺にはコンビニぐらいしかないのだからやっぱり田舎というしかないな。

その何もない町で一人暮らしをしているごくごく平凡な男、それが俺だ。うーん、寂しいね。これでも彼女いるんだけど……というわけでステータス『調理。(魚限定)』と『彼女。』が追加さ

れる。

……当たり前だが冬は寒い。

朝夕なんかはまさに身を切る様な寒さだ。それなのにまだストーブを使用していない。バッドステータス『寒さ×』を持っているにも関わらず、である。それは別に自分を苛めて楽しんでいるわけではない。今月度の俺予算委員会に光熱費の追加申請をしたのにも関わらず、予算委員会の承認が得らず『灯油予算』が降りなかったのだ。この冬は例年より寒いうえに灯油代が高い事から、予想を上回る灯油消費に今月度予算が追いつかなくなったため……平たく言えば灯油を買うお金がなかったのである。そんな灯油すら買えない危機的状况の中、俺は明日から休みを利用して旅行に出掛ける事になっている。ちなみにその旅費は俺特別会計（貯金）から捻出、旅費に關しては問題ない。

これはステータス『放浪』を持つ者の宿命である。だから灯油より旅が優先されるのだ！

……というわけで開き直って旅支度に勤しむ俺。寒さは辛いが旅情を満喫するために我慢、我慢。

バッグに着替えと入浴セットを詰め込み準備完了。わずか10分で荷物をまとめる。

明日は朝早く起きなければならないので、念のため目覚まし時計のアラームをちよつと早めにセットする。これで完璧、心おきなく眠れるってもんだ。

今夜は彼女のバイトが夜勤だから、部屋に来る事もなければ電話も来ない。よって、起きてても暇を持て余すだけ。少し早い気もするが、明日に備えて今日はもう寝よう。寝坊なんてしたらシャレにならんからな……。

2、二人はバカップル！？

冬の朝は寒い。いまだに灯油を購入していない俺にとって北国の朝は本当に過酷なものである。だが、そんな弱音が許されるほど世間の荒波は甘くない。

……ふと目覚めれば、時計の針は6時半を指している。

寒い上にまだ眠い。休みの時くらいもう少し毛布にくるまっていたい……という衝動に駆られた俺は、睡魔の誘惑にされるがままになつて再び眠りにつこうと目を閉じる。だが、己の任務に忠実な奴——目覚まし時計——は善良な一市民である俺に対して容赦のないアラーム攻撃を仕掛けてきた。

ジリリリリッッ！！

ジリリリリッッ！！

「——うがあああつつつ——！」

その大音量の無差別攻撃に、俺は違った意味でノックアウト寸前になる。俺は急いで手を伸ばすと奴の弱点である頭のボタンを叩く。無差別攻撃の後遺症か、ちよつと耳鳴りがする。今朝の攻撃はいつもより強力だったのだ。まあ、そういう風にセットしたのは俺なんだが……。

目覚まし時計との壮絶な戦いを終えた俺は、ベッドから飛び降りると冷氣漂う洗面所へ向かう。これから長旅をするので、気合いを入れて冷水で寝ぼけた脳みそを叩き起こすのだ！

気合い注入だ！

燃えよ、闘魂！

……冷たい水が心身ともにピシッと引き締める。これで気分はすつきり爽快、若干だがテンションも上がってきた。どうやら気合いがうまく注入された様だ。

いい感じに目覚めた俺は気分良く昨夜のうちに用意した荷物を再

度チェックする。スポーツバッグに入る量なんてたかが知れている上に準備するものは着替えと入浴セットのみ。パツと見て終了。あとは出発するだけなので時間までテレビを見て暇潰しする。

……今回の旅は遠く離れた街で働く友人に会いに行くのが目的である。その友人とはもう二年ぐらい会っていないが久しぶりに電話した際に話の流れで遊ぶ約束をしてしまい、しかも休みが偶然重なったので滅多に来ないであろうこの機会は逃せないなあ、と思い旅立つ事にしたのだった。

……外に出ると、あまりの寒さに引き返そうかと思わず本気で考えてしまった。何故なら“冷たい”じゃなくて“痛い”んですわ……恐るべし、北国。改めて冬である事を痛感させられながらも厳しい寒さに耐えつつ駅に向かう。

田舎の駅と舐めていたが、朝はさすがに混んでいた。いわゆる通勤ラッシュというやつだ。それにしても凄い人混み……サラリーマンは毎日こんな戦場の様な修羅場をくぐり抜けているのか？

サラリーマンなど経験した事のない俺には、こんな思いしてまで働きにいく者達の気が知れない。まあ、それが社会の仕組みなんだと独断と偏見をもって決めつける事にして目的の駅までの10分間、短くも長い過酷な電車の旅を満喫する。なに、これからの旅に比べれば通勤ラッシュなどたいした事はないだろう。

……甘かった。田舎でも、いや、田舎だからこそヤバい事を知った俺は、修羅場と化した通勤ラッシュにやられそうになりながら、荷物と身の安全を確保しなんとか目的地に到着。乗車時間が10分だけで助かった。舐めてかかってごめんなさい。通勤ラッシュ、恐るべし！

今回は日本のメトロポリス、花の都・大東京まで旅するので交通

手段は高速バスで行く事にした。無論、新幹線の方が速いのだが景気の悪い昨今の経済不安もあり経費削減しなければならなかったのだ。

ちなみに乗車するバスは9時発車である。バス乗り場は駅裏にある大手電化製品販売店付近のバスチケット売り場の目の前。

俺はバス停付近でウロウロする。

来たのはいいが時間はまだかなりある。まだ8時だ。9時発車の新宿行きは無論来ていない。それでも早め早めが信条の俺は『全席禁煙』という喫煙者に対する弾圧に備え、今のうちにニコチンを大量摂取する事で禁煙地獄を乗り切ろうと煙草とライターを取り出し、適当に座れる場所で丸まって一息つける事にした。

……寒い中、煙草を吸いながら気長に時間を潰す俺。周りには誰もいない。体が冷えてくる。早くバス来いよ、と思わず口にしたのは言っまでもない。

「――ヒョーッちや〜ん!!」

寒さを凌ごうと缶コーヒーを片手に雌伏の時を過ごしていた俺に突如として羞恥心ゼロの叫び声が……。

「ヒョーッちや〜ん!!」

ああ、幻聴じゃない。上の方から俺を呼ぶ声が確かに聞こえる。声の出所を見上げると、そこには手を振って俺の名前を大声で連呼する一人の女がいた。

それにしてもよくデッキの上から俺を発見できたものだ。普通、下なんか見て歩かないぞ？

とりあえず手を振って何かリアクションを取らなければいかん。じゃないと彼女はスネてしまうから。どうせやるならカウンターでいこう。

「みっつき、今仕事終わったのか〜!!」

彼女「みつき」と同じく大声で叫びながら手を大きく振る。今日が日曜日で、しかも朝早くなかったら恥ずかしくて出来んぞ、こんなコト。

海月みつきはデツキの階段をダッシュで駆け降りると俺に向かって猛然と突っ込んで来た！

「——おわっ——！」

俺の体に飛び込む様に抱きつく。は、恥ずかしい奴……。

海月は衝撃によるめく俺から離れ、足元にあるバッグに視線を向ける。そして思い出したかの様に手をポンツと叩くと一人納得した様に頷いた。

「ヒロちゃん、これから旅行だったっけ。東京観光、楽しんで来てね。あ、おみやげ忘れちゃダメよ？」

海月はそう言つと口を押さえて欠伸を堪える。どうやら、夜勤明けで眠いようだ。

彼女の名前は九条海月くじょうみつき。れっきとした俺の彼女である。

名前が美月くづけでなく海月と書くのは父親が海好きだからだそうだ。くらげと書くだけに友達からは“ゼリーちゃん”と呼ばれている（らしい）。

ちなみに職業はタレント。といつてもあまり売れてなくてバイトに明け暮れているのが現実で、今もバイトの夜勤明けだったりする。だが、一応タレントだけあって彼女はなかなかの美人である。長くて艶のある髪に大きな瞳、肌は白くてスベスベしてて触るとクセになる。さらにはまだ二十歳にもなっていないのにエロい体をしている。

性格はとにかくノリが良くてテンションが高い。

その割には一般常識もちゃんと持っており、しっかりした一面も見せるデキた女だ。人の世話は得意なのに何故か自分の事にはかなりズボラ、という訳のわからないトコロもあつたりするがね。そんな彼女は俺と波長がピッタリ合う。いわゆる『相性』が抜群なのだ。年が10も離れているのにも関わらず、俺をあっさり落としたのだからたいしたものだ……。

そんな可愛い子猫ちゃん・海月は腕時計をチラツと見る。時間は8時半前、まだバスは来ない。

「……今日は仕事もバイトも休みだから、時間まで私もいるよ」
そう言っただけ海月は眠そうな顔を無理矢理笑顔に変えて俺の横に座った。俺は残り少ない冷めた缶コーヒを飲み干して煙草に火をつける。

「……おい、フラフラだぞ？ あんま無理すんな。体壊すぞ？」
さすがに眠そうな海月に付き合ってもらうのは気が引ける。

海月はタレント活動（主に売り込み営業）の合間に複数のバイト（しかも昼夜問わず）を入れており、昨日なんかは確か昼間も働いているので今の時間は疲れがピークに達しているはず。夢を追うのは結構なんだが、もっと自分の体を労ってほしいものだ。

「大丈夫、ヒロちゃんがバスに乗ったらソッコーで帰って寝るから。それにまだ若いから多少の無理はヘーキよ、ヘーキ！」

そう言いながらも眠いオーラが漂う海月。見てる方が疲れそうだが言い出すと結構頑固なので話題を変えよう。

「わかった、わかった。ところで、みやげは何がご希望ですか？ いつも頑張り屋さんの海月ちゃんになら、このダイヤモンド並の硬さを誇る財布のヒモを弛めちゃって多少の贅沢は許しちゃうかもよ」

俺は海月の体をつつきながらみやげ話に話題をすり替える。実を言えば、海月に何を買おうか決まっていなかったので一石二鳥だ。海月は俺の指に突っつかれながら少し考える仕草をする。その表情はさつきよりは元気そうだ。

「……うん、テキストなモノでいいよ。久しぶりに友達と会っ
んでしょ？ だったらそっちにお金使いなよ。私のおみやげは残ったお金で買えるモノでいいから」

俺の体をつつき返して答える海月。二人してお互いの体突き

あつて光景は、端から見ればバカッパルそのものだろうな……。それにしても海月はいい子だ。普通ならとんでもないモノを要求してもおかしくないのに、俺の財政状況を理解して控えめに言ってくれている。欲しいモノがあるだろうに……。

俺は海月の気配りに感動を覚えた。ほんの些細なコトだろうが、海月のちよつとした気遣いっていうか優しさに愛を感じたから。

(……よし、びっくりする様なモノを買って海月を喜ばせよう！)俺は誓った。海月が飛び跳ねて喜ぶ様なモノを買う事を。俺と付き合つてよかった、と言える様なインパクトのある素敵なモノを買う事を心に誓った。

寒い中、ラブラブモード全開でバスを待つ二人。時計を見れば8時40分。そろそろバスが来る頃だ。

「——あ、あのバスかな？」

腕を絡ませてピタツとくっつく海月が信号待ちで止まっている高速バスを発見した。

信号が変わり、こっちに向かつてくるバス。時間的にもこれだろうな。

ゆっくり徐行しながらバスは乗車所で停車した。それと同時にバスケット売り場の待機所から乗客と思われる人達が出て来てバスに向かう。運転手はバスのドアを開き、外に出て乗客名簿片手にチケットの確認をし始めた。

「どれ、んじゃ行ってくるよ。いつまでもこうしてたら、行きたくなくなるからな」

少し時間に余裕はあったが、本気で帰りたくなるので俺はバッグを持って立ち上がった。海月もそれに併せて立つ。

「そうだね。私も離れたくなくなるからおとなしく帰って寝るわ

……」

少し寂しそうな表情に変わる。

「……ヒロちゃん、気をつけてね」

そう言つて頬に軽くキスをすると海月はダツシユで階段の方へ走つて行つた。

「じゃあねえ〜!! 旅行、楽しんで来てねえ〜!!」

海月はそう大声で叫ぶと階段を駆け上がり俺の視界から消えて行つた……。

残された俺が周囲の冷たい眼差しに晒され、恥ずかしさに耐えながらバスに乗り込み指定された席でおとなしくしてたのは言うまでもない……。

恥ずかしいからやめてくれ〜。

3、出発！禁煙護送車

バスに乗り込み、長くて厳しい禁断症状との戦い、もとい長距離バスの旅に身を委ねる。さすがに東京行きだけあって、座席は窓側だけだったが全席埋まっていた。それでも空いてんなあ、と思った俺だがよく考えてみればわざわざ日曜日の朝早くに東京まで高速バスを使って行くななんてあんまり考えられない。普通、当日に行くなら新幹線だろう？

そう思うと混んでいると言ってもいいのかもしれない。

……まだ恥ずかしさが残る俺は無性に周囲の視線が気になり、なかなか落ち着く事ができないでいた。

自意識過剰と思うなかれ。いかにも面白く無そうな顔つきの一人の乗客が今も冷たい眼差しを俺に向けているのだ。

朝っぱらからイチヤイチヤしてんなよ。

だぶん、そんな事を思いながら見てんだろうなあ……。

海月はところかまわずベタつくクセがある。別にイチヤつくのが嫌だというわけじゃないが、いい年齢の俺としてはラブラブオーラを周囲に振りまくのはさすがに恥ずかしすぎる。せめて周りに人がいない時だけにしてくれると俺的に助かるんだが……。

チラッと時計を見れば、まもなく9時になるところだ。

「——本日は、東北特急バス、ムラマサ号にご乗車いただきまして、まことに、ありがとうございます」

ちよっと間延びした声でアナウンスが入る。

ふざけてんのか？

運転手のアナウンスがちよっと面白かったので、俺は思わず目が点になる。

ここで笑いを取るとは……なかなかやるな、運転手！

俺のツボにジャストヒットだぞ！

心の中で密やかにガッツポーズする。俺、こういうのけっこう好きだったりするんだわ。そのせいか、俺の笑いのツボは他の人とはちよつとズレてるとよく言われる。まあ、笑いのツボなんて人それぞれだろうけど。

そんな事を思っていると定刻より一分だけ遅れてバスは出発した。花の都・大東京までのおよそ5時間の旅が始まる。

バスは高速道路に入る前に一度だけ止まって客を拾う。そして、その先は東京まで喫煙休憩^{トイレ}以外はノンストップ運行だ。

——バスは禁煙。喫煙者の俺としてはそれはかなり痛い！

へビーな俺にとって、ニコチンを摂取できないこの禁煙長距離輸送に耐えられるのか、それだけがちよつと心配である……。

4、思い出は思い出よ

バスは順調に進む。日曜日の朝だから、当たり前といえば当たり前なんだが。

これがもし、二時間くらい遅いバスだったら……高速道路に乗るまでかなりの時間を要する事になっていたはず。それを知っていた俺は、寒いのと眠いのを我慢して朝一のバスにしたのである。

まだ出発したばかりだからか、さほど苦痛を感じる事なく変わらぬ景色を少しノスタルジックな気持ちで眺める。俺は旅情めいたムードに浸りながらこれから会う友を思い、記憶を掘り起こそうと目を閉じた……。

——たしか、五年ほど前の事だ。当時スーパーでバイトとして働いていた俺は、この不景気な経済状況を打破しようと仕事の掛け持ちをしていた。

一応大卒である俺は週二日・短時間でも出来る家庭教師のバイトや登録制の日払いバイトで家計を切り盛りしており、遊ぶ余裕などまったく無いほどギリギリの状態。

ちなみに海月とはこの頃に家庭教師のバイトで出会った。当時、彼女は中学生……俺にそのテの趣味はないので海月の事は一生徒としてしか見ていない。というよりもマセたガキだなあ、と最初の印象はあまり良くなかったりするのが本音だった。海月には口が裂けても言えないな……。

そんなギリギリの生活に追われる俺は、登録制の日払いバイトであいつと出会ったんだ。

あいつ、近江知加子おつみちかこは俺の四つ下の専門学生。バイト先でよく一緒にいる事が多かったため、自然と仲良くなつてつるむ様になった。彼女はお世辞にも綺麗とは言えなかったが、愛嬌のある娘で俺の

お気に入りリストの上位にランクインする。そんな彼女には看護師になる夢があつて、飲みに行くと思つていいほど看護に対する熱意をぶちまけていたっけ。

俺と知加子は、近すぎず遠からずの奇妙な友人関係を構築していた。いわゆる“恋人関係”というやつではない。

会っていたのはバイトで一緒の時だけだったし、専門学校を卒業したら上京するのが決まっていたから、どうせ別れてしまうのなら初めから付き合わない方がいいと互いに割り切っていたのだ。無論、お互いに若かったのでやっぱり男女関係は持っていたけど。

そんな関係が一年ほど続いた後、彼女は都内の病院に就職を決め卒業と同時に上京して行く。その後、何度か会って遊んだりしたが、互いに恋人ができたり仕事が忙しかったりと連絡も途絶え気味になり、ついには二年前に会ったの最後に彼女からの連絡は完全に無くなった。

そんな彼女から久しぶりに電話が来た時、驚きと同時に懐かしさがこみ上げてきた。

元気にしてるだろうか？

俺は知加子との奇妙な関係を思い起こす。今となつてはいい思い出である。

……このまま目を閉じていると眠ってしまうので、俺は変わらぬ景色を静かに眺める事にした――。

5、禁煙よりも苦痛なもの

約一時間ほど走ったバスは、一度目の喫煙休憩のためパーキングに入る。さすがにまだ俺の体はニコチンを欲していない。しかし、ヘビーの習性ともいうか『吸える』と思うと喫煙所までダッシュしていた。

喫煙所には人が多い。その大半は高速バスの乗客がほとんど。この状況に俺はふと思った。

（……まさに禁煙護送車、ってか？）

喫煙者に対する過酷な規制で喫煙の自由を拘束して現地まで輸送する禁煙護送車……うーん、いまいちネーミングがしっくりこないなあ。

現実問題として喫煙の自由よりも嫌煙権の方が強いから、どっちにしろ太刀打ちできないか。タバコが世に知られた当初は『万能薬』として珍重されてたのに……そんなウンチク出したところで規則は変わらない。下らない事考えて貴重な一服タイムを無駄にするわけにはいかん！

俺は煙草に火をつけるとゆっくりと吸い込む。肺に煙が充満するのを感じながら、体内にニコチンが補充されていく様を想像した。

……あんまし、いいもんじゃないなあ。

もちろん理屈では煙草が体に悪い事なんて百も承知だ。しかし、一旦体が覚えるとなかなかやめられないんだなあ。完璧な中毒つてやつだ……。

他の人達よりも早めに一服タイムを終えた俺は、バスに乗り込みシートに寄りかかると目を閉じて爆睡モードに切り換えた。

吸えない状態が続いたらイライラしそうだし、寝てしまえばこっちのもの。起きたら到着、降りて一服……というナイスアイデアを

ひらめいた俺は寝に入る事にしたのだ。

瞳を閉じて、海月の事を思い描きながら夢の世界へ旅立とうとする。だが、なかなか寝付けない。昨夜、熟睡したせいかな？

うーん、困った。寝たい時に寝れないなんて……東京までの道のりはまだまだ長いっていうのに。

長距離バスは寝れんぞ。ふと旅好きの友人のセリフが浮かんでくる。

(……長距離バスは疲れて眠れない、って言ってたっけ……)

まだ疲れてないんだが。やはり昨夜の快眠のせいだな、こりゃ。

俺は仕方なく寝る事を諦め、まったりモードで乗客がバスに乗り終えるのを待った。

休憩から戻ってくる乗客達。次々と自分の席へと戻っていく。俺はまったりモードで彼等を眺めてると、出発の際俺の事を面白く無さそうに見ていた奴が楽しくないぞオーラを滲ませながら最後に入ってきた。

奴は入ってくるなり俺に気に入らねえ光線を浴びせる。しかも前の方の席に座る俺の横を通り過ぎる時、あからさまに舌打ちもしてきた。

ずいぶんと挑発的な奴だ。よっぽど海月とのラブラブっぷりが面白くなかったのか、奴は不機嫌な表情のまま自分の席にドカツと座った。

(……なんなんだ、あいつは?)

精神衛生上、非常によろしくない。だが、長旅においてこの精神状態は旅情を損なう恐れがある。俺は不愉快な気持ちを懸命に鎮めようと他の事を考えた。

……最悪だ。時間とともに苛立ちは募っていく。

最悪な精神状態は、禁煙長距離輸送の苦痛を最大限に引き出してくれる。もはや旅情を楽しむ余裕など無い。

俺は奴の理不尽な行為に腹立たしい気分になり、無性にニコチン

を欲する様になっていた。

（……イライラするなあ。早く一服タイムにならんのか？）

別にニコチンを摂取したからといって苛立ちが消えるわけじゃない。そもそも喫煙すると気分が落ち着く、というのは禁断症状が解消されるだけで煙草自体にリラックス効果があるわけじゃないのだ。それでも俺の体はニコチンを欲している。苛立ちによりニコチンの消費が激しくなったのか？

とにかくこの劣悪な精神状態から早く脱出せねば……このままでは苛立ちと禁断症状により到着してからメンタルダメージを引かずしてしまいそうだ。

せつかくの再会に水を差すわけにはいかない！

禁煙よりも厳しい状況に立たされた俺は、頭をフル稼働させて気持ちを切り換える術を懸命に模索した――。

6、気分はブルー、でもなんとか到着

“俺ステータス”には、基本能力・特技の他に体力表示・やる気ゲージなどがある……これらは以前、俺の周りでブームになった野球ゲームから拝借している。わかりやすいし面白いので、友人達とはこの“俺ステータス”で自分の状態を伝え合っている。

その中でも使用頻度が高いのが“やる気ゲージ”という自分の精神状態を表すものである。“やる気ゲージ”には全部で五つの状態があり、好調な順からピンク↓赤↓黄色↓青↓紫となっている。

現在、俺のやる気ゲージは5ランク中最悪の“紫”である。この精神状態に禁煙が加わり、俺のストレスはかなり熟成されていた……。

そんな俺の状態とは裏腹にバスは順調に運行している。このまま行けば、予定よりもかなり早い時間に到着しそうだ。

——あれから三度の休憩を挟み東京へ入る高速バス・ムラマサ号。バスの旅もいよいよクライマックスを迎えるわけだが、今回のイベントはこれからが本番。早くこの状態から回復せねば……。

さすがは日本の首都、日曜日という事もあるが高速道路なのに大渋滞。ノロノロと進むバスに俺のメンタルダメージは増える一方で、一服程度では回復できないくらいにテンションが低下していた。

この状況を打破するため俺は海月にメールを打つ。しかし、夜勤明けで爆睡中の海月からは返事が来ない。

疲れが溜まつてるから仕方ないか。それこそ海月は休む間もなく働いているのだから……。

バスは渋滞をなんとか切り抜け王子に到着。だが降りる客はいな

い。おそらく終点の新宿まで誰も降りないだろう。バスは一分もしないうちに発車する。

それにしてもすごい渋滞だ。バスは予定より一時間以上も早く東京入りしているのだが、どうやらこの渋滞を計算に入れている様だ。ここからが長いというわけか？

やる気ゲージが紫の俺にとって、このノロノロ運転はかなり痛い。まあ、仮に待ち合わせ時刻より早く着いても知加子が来るまでは身動きが取れないんだけどね……。

バスは渋滞の中、路駐の車をうまく避けながら走る。ここら辺の運転テクはさすがだね。俺は内心、運転手の技術に喝采を浴びせた。窓から外を見るとやはり人が多い。俺の住む街とは大違いだ。次の目的地・池袋はもつと凄いいんだろうなあ……田舎者丸だしの俺はこの人の群れを見て東京に来たんだと実感した。

そんな感慨に耽る俺をよそにバスは池袋に到着する。

予想通り降りる客はいない。そして、さっきより人が多くなっているのを感じた。

こりゃ、渋滞はさらにひどくなっていく気がするなあ。

相変わらずテンションの低い俺は、苛立ちと禁煙と渋滞のトリプルパンチに終点の新宿まで気力が持つのか本気で心配になった……。

だが、神は俺を見捨てなかった。俺の悲観的な不安を払拭するかの様にバスは順調に走り出したのだ！

日頃の行いの賜物か？

思わず自画自賛してしまうほどバスは軽快に進んでくれる。

——14時を少し回ったところでバスは終点・新宿駅新南口に到着。予定到着時刻よりも30分以上早い到着に限界ギリギリだった俺のやる気ゲージは1ランク回復する。それでもまだ青なんだが、紫のままでいるよりはかなりマシだ。

待ち合わせの時間にはまだ早い、バスが停車したと同時に俺はムラマサ号を降りた——。

7、感動の再会？

高速バス運行時刻表によれば、俺の住む杜の都から花の都・大東京までの所要時間は5時間半となっている。つまり、9時に出発したバスは14時半に到着する事になるわけだ。しかし交通状況が良かったのか、バスは予定よりも30分早い到着……バスを降りた俺は、とりあえず車庫だか倉庫だかわからない乗降スペースから待合い所に向かい、そこで知加子が来るのを待つ事にした――。

待合い所はかなり狭いうえにたくさんの人が出迎えに訪れている。所狭しと立ち並ぶ人の群れに俺は思わずゲンナリした。

(……なんなんだ、この人集りは……)

人酔いしそうなくらいの人口密度。人の行き来が激しいこの場に留まるのは非常に困難であると思われる。知加子が来るまでの間、やる気ゲージ“青”の状態でこの人混みの中に佇むのは精神的に危険すぎる！

ここは、外に出て対策を練た方が安全だ。ついでにニコチン補充もしておこう。

俺は一服つけようと荷物を抱え、人の群れをかき分ける様にまっすぐ出口へ進んだ。

「――ヒロ！」

待合い所を出ようと人の隙間をすり抜ける俺の耳に飛び込む声。

「ヒュー！！！」

……どこかで聞いた事がある声だ。もしや、知加子か？

まだ待ち合わせの時間まで30分近くあるのに、すでにこの過酷な環境に同化してたのか？

振り返って見る。しかし、人がいっぱい誰が誰だかわからない。俺を発見したのだから、視界には入っているはずなんだが……。

俺は人混みに紛れた知加子を懸命に探す。

「ここだよ」

声のした方向を見ると、ベンチに座って手を振る知加子の姿があった。

二年の月日は、人を変化させるには十分だ。久しぶりに再会した知加子を見て俺は、懐かしい気持ちとともに綺麗になった彼女に何故か寂しくなった。どうしてだろう？

「久しぶりだね。元気だった？」

そう言ってベンチから立って俺を出迎える知加子。

想像したよりも雰囲気が大人数びている。俺も年を取るわけだな。

「オッス」

「オッスス！」

笑顔は以前と変わらない。

ああ、知加子だ……俺は少しだけ安堵する。変わらないモノが、そこにはあったのだろう。変な話だが、彼女の笑顔にホッとする自分がいた。

「……ずいぶん早く来たなあ。ヒマだったのか？」

人をかき分ける様に歩きながら疑問を口にする。まあ、早いに越した事はないのだが、久しぶりという事もあり何から話していいかわからずにヒネリのない話題にしてしまう。

「……なんとなく、ね。早く会えてよかったよ。これからどうする？ お腹空いてない？」

知加子是人混みをうまく避けながら答える。しかもいつの間にか俺の手を取っている。そして半ば引つ張られる様に出口へ――。

……外もたいして変わらなかった。見渡す限り人の群れ。日曜日だからか？

知加子のリードで駅裏にある喫煙所に辿り着いた俺は、空いているベンチに腰掛けて一息ついた。

「……ヒロ、禁煙辛かったでしょ？ ちょっと休憩してから行こ」

さすがは元相方。俺の事をよく知っている。正直、メンタルダメージが大きかったのでここで喫煙できるのは俺的かなりのヒーリング効果を生む。

ポケットから煙草とライターを取り出しニコチンタイムへ突入！

「……ふう、生き返った気分だ……」

苛立ちと禁煙と渋滞のトリプルパンチでノックアウト寸前だったが、禁煙地獄からの生還に俺のやる気ゲージは一気に2ランク回復する。

「ヒロ、久しぶりだね。元気そうでよかったよ」

隣で感慨深げに目を細める知加子。煙草を嗜む俺に昔の記憶が甦ったのか？

「お前も元気そうだな。もうすっかり都会の人って感じだわ」

あの頃と比べるのは間違いかもしれないが、ずいぶんとア力抜けている。大人らしくなったっていうか色気があるっていうか……そうそう、大人の女って雰囲気を出しているのだ。

「そんなに変わって見える？ でも、中身はあんまし変わってなかったりするんだよ」

あの頃と変わらない笑顔で謙遜する。

でもやっぱり変わって見える。それはきつと、いろんな経験をしてきたからに違いない。

あの頃とはもう違う。お互いに別の人生を歩んでいるんだ……少し寂しい気もするが、二人が再び同じ“場所”で交わる事はもう無い。そう思うとあつさり別れた事に後悔の念が生じる。

「そうか？ すごく綺麗になってるよ。いやあ、俺ももったいない事したなあ……逃げた魚は大きかったわ」

口に出してはいけなかったかもしれない。今さらこんな事を言うて過去を蒸し返す事なんて無いのだ。

案の定、知加子は少し複雑な表情になる。

「……冗談でも、そんな事言っちゃダメだよ。ヒロ、彼女いるんでしょ？ 元力ノに未練あります、みたいなセリフ聞いたら彼女悲

しむよ……」

少し責める口調で俺の失言を諫める。お互いに割り切っていたのだから後悔してはいけない。知加子の目はそう言っている様に見える。

「悪かった。これじゃあ、まるで浮気しに来たみたいに聞こえるよな？ 今の言葉は取り消すよ。すまん！」

久しぶりの再会に、懐かしさに俺の心は惑わされていた様だ。少し頭を冷やせ、俺！

「……ヒロ、そんなに謝らなくていいよ。それに謝る相手が違うでしょ？ 懐かしさから思わず出た言葉ってくらいわかってるから、私は別に気にしてないよ……」

知加子はそう言っただけで俺の失態を許す。

いかな、懐かしさが先立ってしまった。あの頃に戻ったみたいな感覚がするぞ。

危うく今回の旅の目的から外れそうになり、俺は苦笑いする他なかった……。

8、行動開始

至福の一服タイムを終えた俺に、いつまでも喫煙所のベンチでマ
ンウォッチングする余裕などない。知加子の休みが今日と明日の二
日だけなので、無駄な時間を過ごす事ができなかったのだ――。

今回の旅は、ただ東京を満喫するというよりも“友人との交流”
にウエイトを置いている。

滞在日程は三泊四日の予定で、仕事の方はもとの休み（連休）
に二日プラスしてもらっていた。俺のスケジュールでは今日明日は
知加子と、三日目は大学時代の親友と会う予定を立てており、時間
的にあまり余裕を持った行動は取れなかったりする。

今日はブラブラしながら適当に観光、予定ではオールで遊ぶ事にな
っている。

俺は東京の地理に疎いので、タイムスケジュールの方は知加子に
すべてを託しており、この事は知加子の了承を得ている……気分は
さながらツアーの観光客だ。

だからといって、あまりマイペースに行動して彼女のリードを乱
してはならない。たとえ予定より早く会ったとしても、だ。特に俺
は、相手にイニシアチブを与えるとすべてを任せっきりにする習性
があるので、あまり和んでいるとまったりモードに入ってしまう恐
れがある。今回の場合、それは許されない。

「――んでは、そろそろ行きますか！」

俺は勢いよく立ち上がり、まったりモードからの脱却を図る。こ
れから遊び回るのだから、テンションを上げていかなければ！

「ヒロ、ご飯は？ まだ何も食べてないでしょ？」

知加子はバッグからガイドブックらしき小冊子を取り出すとパラ
パラとめくりはじめた。

今は少し中途半端な時間帯だ。昼メシを食ったなら、まだお腹は空かないだろう。無理に俺に合わせる必要なんてない。

「そういうチ力はメシ食ったのか？ 腹減ってないならまだいいぞ？」

今はそんなにお腹が空いてるわけでもないので彼女の腹具合に合わせよう。

「今日は朝しか食べてないよ。近くに軽く食べられるところあるし、せっかくだから何か食べようよ」

どうやら俺がメシ抜きである事を予想していた様だ。さすがは俺の行動パターンを知り尽くしているだけあってそこら辺のところは抜かりない。俺のメシ抜きをしつかり想定している。

「……んじゃ、そうしょつか」

「そうしよう！ すぐ近くにお店あるから、そこで軽く食べよう」
知加子はその言う俺の手を取って、人酔いしそうなくらいの人混みをかき分けて行く。

……はつきり言ってる人の多さに周りの建物を見る余裕なんてない。よそ見しようものなら衝突してしまう。

（ホント、都会は違うなあ……）

俺は当たらない様、かわしながら知加子について行く。もし手を握ってくれなければ人混みに流されそうだ。

地元では考えられない。一応、俺の住むところも政令指定都市なんだが……都会レベルが違いすぎる。

そんな事を思いながら俺と知加子は、一軒の店の中に入って行った――。

9、遅い昼食

人混みをかき分け一軒の喫茶店に飛び込んだ二人。パツと見、テーブルは埋まっている感じ。予想はしていたが、店はかなり混んでいるっばい様だ。

「——いらっしやいませ、お客様は二名様でしょうか？ お煙草はお吸いになれますか？」

店員がメニューを持って足早に駆け寄る。混んでるのに迅速な対応だなあ、とちよつと感心。

「はい。あの、時間かかります？」

知加子は店内を覗き見る。するとカップルが奥の方からレジへ向かうのが見えた。すぐ空きそうだ。

「ただいまお席の準備をいたしますので、少々お待ちいただきますがいかなさいますか？」

「待とうぜ」

すぐ座れそうだし、引き返すのが面倒なので俺は間髪入れず即答した。

「かしこまりました。では、お時間までこちらのメニューをどうぞ」

店員はそう言ってミニサイズのメニュー表を渡し、軽く一礼すると店内に戻って行った。

俺達はとりあえずメニュー表を見ながら席が空くのを待つ。メニューを見ると普通だ。当たり前だな。

「——ここってけっこー人気あるんだよ。広いし美味しいしメニューも豊富だし。前から行こうと思ってたんだけど、なかなか行く機会なかったから実は私も初めてなの。だからちよつと楽しみなのよね」

知加子はそう言って悪戯っばい笑みを浮かべる。微妙に目を細め、

口元をちよつと弛ませた感じの笑顔……ここら辺のところは昔と変わってないなあ。時折見せていたその笑顔に俺は懐かしさがこみ上げ少し癒された気分になった。

「——お客様、席の準備が整いましたのでご案内いたします」

先ほどの店員が来た。そして、店の奥の方へ案内される。

「……ご注文がお決まりになりましたら、こちらのボタンを押してお呼び下さい」

店員はそう言うときまたレジの方へと足早に消えていった。これでゆっくり落ち着く事ができるってものだ。

俺達はメニューを取って軽く入れられるものを探す。見た感じどれもボリウムがあつて旨そう。意外にすっかり腹に入れられるメニューが多い。

「うーん、けっこーボリウムあるんだなあ。夕飯まで持てばいいから、あんま量はいらんのだが……」

何気に腹が膨れそうなモノばかりでなかなか決め切れない。知加子の方も何にしようか迷つてる様子。まあ、時間的には余裕があるわけだし、一服つけてじっくり見てみよう。

「ヒロ、どれにするか決まった？」

喫煙モードの俺を見て注文が決まったと思つたのか、メニューを見ながら知加子が話しかけてくる。

「いんにゃ、まだ。けっこー迷うわ」

「……じゃあ、これにしない？ このセットメニュー、美味しそうだし二人前だつて」

知加子はメニューを俺に見せて指さす。

「ペアセット？ ほあー、旨そうですね」

量が多いのでよく見ずに飛ばしたやつだ。なるほど、二人前だったのか。

「三種類あるのか。どれにすつか？ チ力はどれがいい？」

どれも似た様なものだが、微妙な違いがあつて選ぶのに難儀する。まるで選ぶ者のセンスを問う様なメニュー達。この“微妙な違い

”がクセモノだったりする。

デートにおいて、このテのセンスがその後の展開を左右する事は多々ある。あまりテキトーに決めると、その後の食いつきが悪くなるのだ。少なくとも俺の経験上、微妙なセンスの有無、いわゆる“違いのわかる男”と思われるのと思われたいのでは、そのゲット率はかなり違かった。

「私はなんでもいいよ。ヒロが決めてよ」

ほら来た。やっぱり男に選ばせる。

海月もそうだが、何故女は男に選ばせるのだろう。すでに食べた物を決めてるクセに。そんなに相手のセンスが気になるものなのか？

「じゃあ、このチキンのあるやつにするわ。それでいいか？」

食べたい物を頼む。これ、定説。

今回の場合、センスの有無を気にする必要なんてまったくない。

別に知加子をモノにするつもりじゃないからね。

「オツケー。じゃあ、ボタン押すね」

知加子は少し満足気な笑みを浮かべながらボタンを押した。どうやら自分の選んだやつと同じだったみたい。なんか審査されてるみたいでイヤだなあ。

…… やってきましたペアセット。見るからに旨そうだ。

食欲をそそる香り漂う、香ばしいこんがりトーストにファーストフード定番中の定番ポテトフライ、ピリ辛エビチリとエビマヨのコンビに俺の心を射止めた特大の照り焼きチキン……これらが二人前で税込み千円。ボリュームがあるのに安い！

「ボリュームあるなあ……」

ファーストフードの“キングオブキングス”ポテトフライを頼ばりながら俺は空きっ腹を満たしていく。

このペアセットにより俺のやる気ゲージが1ランク上昇。ここに来てやる気ゲージが“ピンク”、つまり気力が絶好調になった……

それほどの衝撃的な安さと旨さがあつたってわけ。

「ホント、美味しいね、来てよかったよ」

それにしてもこのペアセット、いくら二人前の量とはいえ女の子には少しキツイ様な気がする。量的に三人前くらいあるといい。

なかなか重い昼食になりそうだ。ゆっくり食べよう。

「……こうして会うのは二年ぶりだな。その間、元気にしてたか？」

特大の照り焼きチキンを解体しながらありきたりな話題を振る俺。たしか、看護師になって都内の病院で働いてるのは聞いている。

彼女が上京してからはプライベートな話をする事が無くなったので、俺はそれ以上の彼女を知らなかった。

「同じ病院にいるよ。忙しすぎて毎日死にそうになってる。休みもなかなか取れないから、彼氏はできないし遊びにも行けないよ」
相当ストレスが溜まってるのか、知加子はそう言ってため息をつく。

「やっぱ、仕事キツイからみんなすぐ辞めちゃうんだよね。人手不足で休日返上だし、ミスひとつが重大な事故に繋がっちゃうから精神的にマイってしまふのよ。実際、私も何度辞めようと思ったかわからないわ」

重いなあ。たしかに看護師ってハードな仕事だよな。ただでさえ相次ぐ医療ミスの問題で大変だって聞く。

「最近、ミス連発しててさあ、地元に帰ろうかと思うくらい自信喪失気味なんだよね。疲れてるから出歩く気にもなれないし、職場と家の往復で気晴らしもできない。私、向いてないのかなあ、って思っただよ……」

少し自嘲気味に笑い、再びため息。けっこー本格的に悩んでる様だ。

できる事ならなんとかしてやりたい。俺は知加子の話を真剣に考える。だが、安っぽい言葉しか思い浮かばず、声を掛ける事ができ

なかった。

「……ごめん。せつかくの再会なのに、暗くしちゃったね？ ヒ口はどう？ 元気そうだけど、今の生活に満足してる？」

満足、か……これまた難しい質問だなあ。

とりあえず、仕事はやりがいがあるよなあ。

安くとも生活に困らんくらいには収入を得ているし専門的なスキルも身につけられる。“専門職は不景気に強い”ってよく言うし、たとえ今ウチのスーパーが潰れたとしても、専門職系スキルを持つ事が転職時に有利に働くから一般社員よりは転職も比較的簡単だ。そういうった面で言えば、いくら忙しくとも仕事面に関して不満は特に無いな。

プライベートの方だって、海月という可愛い彼女がいるし、それぞれに自分の生活や家庭を持つている友人達とも度々会っている。会社仲間とはよく遊ぶし、人間関係はかなり良好でストレスもあまり感じない。

平凡と言えば平凡だが、当たり前前の生活ができるって事は、簡単な様で意外に難しいよな？

不安やストレスの無い生活……俺ってけっこう満たされてるんじゃないか？

「……俺は、今の生活にけっこう満足してるかもしれん。仕事はたしかにキツイけど、これといった不満は特に無いし、プライベートもかなり良いし……やっぱ満足してるわ」

嫌みに聞こえない様、言葉を選んで答える。それを聞いた知加子は少し寂しそうな表情に変わる。

（……もう少し気を使えばよかったか？）

旅で浮かれてるのか、優しさに欠けてたかもしれない。俺は、自分の気遣いの無さを感じてしまう。

（せつかくの再会だ。もっと楽しまなきゃ）

見事なまでにサイコロ状に解体された特大照り焼きチキン（元）を堪能しつつ、俺は知加子を元氣付ける方法を模索した……。

10、テンション上げよう

「——ところで、ヒロは今の彼女と付き合ってたのくらい経ってるの？」

不意に話題を変えてくる知加子。暗い雰囲気になるのを防ぐためか。

それにしても海月との付き合いか……。

出会ったのは時期的には知加子とほぼ同じだ。あの頃はスーパー（当時バイト）の他に家庭教師と人材派遣のバイトも掛け持ちしていたっけ。まあ、その頃は海月に対して何の感情も抱いてなかったな。実際、海月を女として見る様になったのは彼女が高校を卒業する辺りだったし。

「付き合い始めたのは、昨年からかな？ 今の彼女は俺が家庭教師のバイトしていた時の生徒だ。チカも知ってる奴だよ」

「私の知ってる人？」

ピンとこないのか、首を傾げて考える仕草をする。

「……ごめん。ちよつと思いいせない……」

さすがにすぐには思いいせないか。知ってるとはいえ、俺の話を聞いただけで実際に会った事はないからな。

「ほら、アイドル志望の小娘でクラゲって書いて海月っていう奴ゼリーちゃんって呼ばれてる……」

「——ああっ、あの娘!？」

クラゲで思いい出したのか、最後まで言う前に手をポンツと叩き声をあげる。

「……ふん、ヒロの年下好きに磨きがかかったってわけねえ」
知加子は少し皮肉っぽい視線を俺に浴びせながらも妙に納得した素振りを見せる。なんか、誤解しているんじゃないか？

「その娘ってヒロと一回りくらい離れてるよね？」

皮肉というより軽蔑した様な視線に感じる。

「……ロリコン。やらしい。職質されたら捕まっちゃうよ」
ボソツ、と強烈なストレートが俺を襲った。

精神的にかなりキタ……よりによってロリコンかよ！

「ちよつと待て。それは違うぞ！」

全身全霊を込めて全力で否定する。

たしかに年は離れてるが、断じてそんなシュミはない。それに海月はまだ社会人、立派な大人だ。

「人聞きの悪い事言わんでくれ……」

そんな俺のセリフなど無視して知加子は俺の慌てっぷりに笑いを堪えている。

「ごめんごめん。冗談よ、冗談。そんなに全力で否定しなくてもいいよ……あはは」

知加子は堪えきれず腹を抱えて笑い出す。俺的にいまいち納得いかなかったが、せつかく明るい雰囲気になった事だし、ここで話題を引っ張るのは得策じゃない。よって、ここは我慢の一手で知加子ペースに甘んじる事にした。

これでテンションが上がれば、それでいい。これからの時間の方が長いんだし、今のうちにテンションを上げていかないとね……。

11、ウィットに富んだ食後の散歩

時間はまだ15時半を少し回ったところ。再会してから二時間も経っていない。

遅い昼食を終えた俺達は、まだ時間も早い事から駅周辺を散策する事に。

ご飯を食べた事により若干テンションが上がった二人は、人の波に遭難しない様、手を繋ぎ人の群れから逃げる様に脇道へと避難する。

ただ歩くのでさえサバイバル。

なんちゃって都会出身の俺は、そんな訳のわからないフレーズを思い浮かべ、内心このネタ使えるな、と細く笑む。

——さすがに脇道に入ると歩きやすい。人もそんなにいないので、俺は知加子の手を放しヘビーの嗜み“歩きタバコ”を堪能しようとポケットから煙草を取り出そうとした。

「歩き煙草はダメだよ」

俺の行動を読んだ知加子が腕を取り、ヘビーの嗜みを妨害する。

「はいはい。わかりやした」

対応が素早いじゃないか。腕組みするかたちでヘビーの嗜みを止められた俺は、仕方ないのであきらめる。

「……おい、放せ。手が抜けん」

了承したんだからさっさと放せ。

「ダメ。放したら吸っちゃうでしょ。だから、吸っていいトコまではこのままにいる」

知加子はしっかり腕をまわしてピッタリと密着する。

……おい。なんで拘束されなきゃならんのだ？

たしかにヘビースモーカーの俺は『禁煙』の看板が掲げられなければ所構わずどこでも吸う。嫌煙者から見れば迷惑極まり無い不届

き者ってやつだ。だが、ここまで拘束されるほど俺は聞かん坊じゃないぞ。

昔はこんなじゃなかったのに。知加子の妨害工作に俺は違った意味で年月の流れを感じる。しかし、この体勢って端から見るとバカップルじゃねーか？

「恥ずかしいから放せ。なんかラブラブモード全開のバカップルみたいだぞ。マジ勘弁だって」

わざわざ東京まで来て浮気なんてシャレにならん。海月の顔がチラつくので気が引きまくる。だが、知加子はそんな俺の声を無視してベタベタくつつく。

知加子の悪戯行為をなんとか阻止しなければ……。

「チ力、聞いてんのか？ 彼女に悪いんで、あんまベタベタしないでくれよ」

この女は昔から変化球を見逃すので、俺はストレートに拒否する。

「別にこれくらいなら構わないじゃない。腕組みだけじゃ浮気なんて言わないでしょ」

……う、打ち返しやがった。見事なセンター返しじゃないか。

「私、最近へこみ気味なんだから、ちょっとぐらい優しくしたって罰は当たらないわよ？」

開き直りかあ？

俺の言葉はあっさり無視だ。このままでは知加子ペースに引き込まれる。

「わかったわかった。後でたっぷり癒してやるから、とりあえず離れる。歩きにくくてたまらんわ」

どうにでも取れる意味深な言葉で反応をみる。

「……なんかエッチだなあ。浮気はしないんじゃないの？ ま、バレなきゃ浮気にならないけど……って、まさかヒロ、溜まってるのか？」

なんちゅう事を言うんだ、この女は。

「お前の方がエロいぞ。俺は溜まってないし、バレなくても浮気

は浮気だ。変な理屈、語るなよ……どうかしてるぜ？」

相変わらず拘束状態の俺は、頑なに離れようとしないう知加子を追撃する。

「まあ、お前がどうしてもって言うんなら、少しは考えてもいいが……」

さすがにこれは言い過ぎかと思ったが、知加子はそれすらも無視してお返しとばかりにさらに強く腕を抱いた。

二の腕に当たる女性特有の柔らかさが挑戦的に男心を刺激する。ずいぶん挑発的だなあ。

「……って、何かリアクション取ってくれよ。対応に困るんだけど？」

「あら？ ジョークかと思ってたら、ホントにしないつもりだったんだ？ 泊まりで来たから、私それもコミで来てるのかと思ってたよ。ま、ヒロがそれでいいんなら私はそれでもいいんだけど。でも、きつと後で後悔しちゃうよ？」

「こらこらこら。さすがにそんな節操無しじゃないぞ……」

「じゃあ、もう移動しよう」

しれっとした表情で返す知加子。そんなもんコミコミで考える奴がどこにいる。いったい何を考えてるんだ？

「……慰めてくれるとちょっと期待してたんだけどね」

微妙な含みを持たせて呟く知加子。手を放したと思ったら再び俺の手を取って人の群れする駅に向かって引張っていった――。

12、観光の始まり

日曜日、駅周辺は、人だらけ（字あまり）

……お前ら、他に行くトコないんか？

自分の事など棚に上げて内心グチる俺。この光景、地元ではあり得ないんですけど。

ここでひとつ思った。一人で来たら絶対迷う！

知加子の先導により駅周辺を迷わず歩き回っているが、一人だったら間違いない人の波に飲まれて訳がわからなくなっているだろう。“サバイバル都市・東京”……そんな意味のわからんネーミングを付けたくなるほど、この人の集り様はヤバいと思った。

「ヒロ、これから地下鉄乗るよ。ほら、こっちだよ」

声とともに手を引っ張られ、人の波を逆らう様に地下へ降りる。

「今から汐留まで行くからね。大江戸線っていう赤紫っぽい色の地下鉄だよ」

俺の手を取り簡単な説明をする知加子。

今日のスケジュールは彼女のお任せコース。どこに連れて行かれるのか、直前までわからない。

とりあえず次の目的地は汐留か。地名だけは知っている。というよりも、それぐらいしか知らない。

なんだか一昔前に流行ったミステリーツアーみたいでワクワクしてきたぞ。

「——チカ、ちょっとしたミステリーツアーみたいだな？」

年齢的に意味が通じるか疑問だが、あのマニアックな懐かしのミステリーツアーに思いを馳せてみる。

「……はあ？ ミステリーツアー？ 別に怖いトコなんて行かないわよ」

通じないか……五つも違わないのになあ。やっぱりマニアックなんだよなあ、ミステリーツアー。このテのネタは旅愛好家にしか通じないのか？

少しへこみそうになった俺は、知加子に導かれるがままに切符を購入し、大江戸線のホームへ降りて行った……。

東京という街における交通機関の利用者数は、はっきり言って尋常ではない。だからなのか、待ち時間が五分と掛からず非常に便利だ。

ホームへ降りて電車が発車した時は、ヤバいなあ、と時計をチラッと見て知加子の機嫌を伺ってみた。しかし、知加子は平然とホームに立ち、すぐ来るから待つてよう、と柱に寄りかかろうとする俺に手招きする。

「……ああ、そうか。すぐ来るんだよな」

言われて気づいた俺は、忙しない都会らしさを感じながら黄色い線ギリギリの位置へ移動した。

待ち時間が無いのは良い事だ。意外に移動時間って無駄になる事が多いから、移動が多い場合などは非常に助かる。特に今回なんて移動が多そうだし。

そんな事を思っていると乗車案内のアナウンスが流れた。もう電車が来る。

「来た来た。おつ、空いてる空いてる。座れそうだな？」

車内は思ったより混雑していない。テレビでよく見る光景を連想していただけに座れないと覚悟してたのに。

嬉しい反面、ちょっと拍子抜け。

「……ヒロ、いつでも混んでるわけないでしょ……」

知加子は呆れ気味に呟くとバッグで俺を小突く。

人の少ない午後の電車。座席に腰を下ろして目的地までの短い間、電車特有の揺れを感じながら車内広告に目を向けた。

「ふん」

車内広告はどこも同じ様な内容だ。だが地名が変わるだけでその印象は全然違う。田舎者丸出しの俺は、この不思議な感覚に改めて東京に来たんだなあ、と妙に納得しつつ飽きる事無く車内広告を見続けた。

……無言の時間が過ぎる。隣の知加子は俯き加減になっていた。
「どうした？」

具合でも悪いのか？

俺は知加子の背中をさすりながら声をかける。

「……あ、ごめん。私、電車に乗ると眠くなるんだよね……」

そう言って俺の肩に頭を当てて枕代わりにする。

「着くまで」

このままで、って事か？

まあ、着くまでならいいか。十分くらいだし。

どうせなら海月にメールでも送っとくか。そろそろ起きる頃だろう。

俺は懷から携帯電話を取り出すと海月にメールを打つ事にした。
今回は軍隊風メールでいこう。

『件名：東京より入電』

『おはよう。ただいま都営地下鉄の中なり。まもなく汐留、これから非常に楽しみ。目一杯観光するなり。』

……これで良し。

電波弱いから着いてから送信しよう。

さて、俺も少し休むか。体力を温存だ。寝ない様にだけ気をつけないとな……。

13、ベタです

時間は十六時前だった。

汐留に着いた二人は地上へ出る。無論、海月にメールを送信したのは言うまでもない。

生憎の曇り空がなんとも言い難い雰囲気醸し出す。

「……ほら、すぐそこがテレビ局だよ。人が集まってるところ。見える？」

外に出て開口一番、人の群れに向けて指をさす。

そこには、何気に毎朝テレビで見ている光景があった。

「おおっ！」

テレビで見慣れたものがすぐ目の前にある。画面を通してしか見た事のない光景が眼前に広がっている事に不思議な気分になった。

「さて、ちよつと見て行こっか。ベタだけど、旅の話題にはなるでしょ？」

俺の反応に知加子はニンマリ。そして俺の手を取って軽快な足取りで人の群れに歩き出した。

「……駅のすぐ目の前にあるんだな？ いやあ、びっくり仰天だね。毎朝見てるのに、実際に見るとなんだか新鮮だよ」

少し大げさかもしれないが、俺はちよつとした感動を覚えている。ベタでもいいぞ。ネタになるから。

次に会う友人は観光など絶対してくれないし、まさか知加子からみやげ話が得られる事など想定していなかったので心底嬉しかった。

「うふふ。そう言ってくれると嬉しいよ」

きらびやかなイルミネーションが施されたお決まりのクリスマスツリー。俺と同じく観光に来たであろうカップルや家族連れ。

クリスマスモード漂う中、俺達はそれらの群れに混じり、すぐ先に控えたクリスマスを一足早く堪能する。

仕事に戻れば、クリスマス前後から正月明けまで休み無しのハードな日々が続く。そう思うと知加子の観光案内はたまらなくグッドだった。

「……なんか、こうしてるとカップルみたいだね？」

このムードに感化されたのか、俺の腕に手をまわし寄り添う様にして静かに囁く。

周りから見れば、きっとそう見えるだろう。

「そうだな」

不思議と否定する気にならない。俺もこのムードに飲まれてるのだろうか？

ひとしきり見て回った俺達は再び駅へ戻る。次なる目的地へ向かうために。

「次はゆりかもめに乗ってお台場へ行くよ」

都営地下鉄のそれとは違う、青い券売機の前で切符を購入する。モノレールか。

ゆりかもめは以前、一度だけ乗った事がある。俺の記憶が正しければ、座席が小さくて座りにくい、という印象があった。それと線路とホームの間がガラスだかプラスチックの壁で仕切られているのも覚えている。

「ヒロ、お台場には行った事ある？」

すっかり腕を絡ませて刺激的な弾力を押しつける知加子。しかもあからさまにすり寄せてる。明らかに誘っていると言わざるを得ない。その挑発的な行為とは裏腹に、なんとも色気のない質問を普通の口調でしてくる。

（……誘ってんのかふざけてんのか、いまいち読めんなあ……）
なんだか対処しにくい展開に俺は戸惑う。

旅はロマンスを誘って来る、という話を聞いたが、本当の事らしい。

この展開、むげに拒絶するのももったいない。だからといって向

こうから誘われて、というのは男としてあまりにも情けない。

知加子はただ慰めてもらいたいただけなんだし、ちゃんと割り切れるからドロドロした展開にはならないだろう。知加子も期待してるわけだし、ここは俺から誘うべきか？

自分から率先して浮気する気は無いが、流れに沿って一夜くらいなら、と正直思わないわけでもないし。

でも、海月に悪いよなあ……。

俺自身は、愛とセックスはまったくの別物と思っているからセックス自体にはあまり罪悪感を感じない。実際、成り行きで何人かと関係を持った事もあるので、綺麗事を語る気などさらさら無い。正直に言えば海月じゃ物足りない部分もあるし。

それでも気が引ける。やっぱりダメだよなあ。

非常に美味しいこのシチュエーション。据え膳食わねば男の恥、ってか？

「お台場は、とっても素敵なお台場になって、チョーいいよ」
なんとも意味深なセリフ。お台場ってたしか、デートスポットとして有名だったよな。以前、友人がそう言っていた事を思い出し、このまま流されていきそうな気がしてきた。

「ねえ、私の言いたい事、わかるよね？」

肩口に頬をすり寄せながら甘い声を出してくる。

「……わかってるわかってる。まだ時間があるし、ちょっと待て」
往生際の悪い俺の良心。気持ちの繋がりと体の繋がりの違いを認識してても、いまいち“そこ”へ踏み切れない……まさに理性と欲望の板挟みだ。

「うんうん。まだ時間もたっぷり、あるからねえ、焦らずに待つ事にするわ」

微妙に目を細め、口元をちょっと弛ませた感じの笑顔で答える。
そして、絡めた腕をすつと放す。

「……もう来るよ」

知加子がそう言うのと、ゆりかもめは静かにホームに入ってきて来た。

「さ、行こう」

先ほどの仕草が嘘の様に素っ気ない口調でさっさと乗り込む。知加子の思考パターンがまったく読めない。

(……うーん。難しいねえ……)

はつきり言って俺はどう対処していいのかわからなくなっている。このパターンは完全に知加子ペースだ。本番はこれからだっていうのに、今からこれでは先が思いやられる。

ゆりかもめの車内では、狭い座席に腰掛けて眺めの良い景色を堪能する知加子とは対照的に、俺は流れゆく景色をただ眺める事しかできなかった……。

14、プレゼント

……無言のまま、次なる目的地・お台場に到着。

きらびやかなイルミネーションやクリスマススムード全開の周囲に翻弄され、俺の心は理性と欲望で渦巻いていた。このパターンのままで行けば、非常にスリリングな夜を迎える事は間違いないだろう。やるか、やらぬか……今、俺の脳内風紀特別査問委員会は、重要テーマ“知加子との夜”について壮絶な論戦を繰り広げている。

知加子の中では、すでに“夜は欲望の赴くままに……”は公然のものとなっている様だし、おそらくスケジュール的にそっち方向に行くのは間違いなさそうである。まあ、男女が泊まりで会うつていうシチュエーションを鑑みれば、誰だってそう思っても仕方無いが……。

この事に関して言えば、俺のミスであると断言せざるを得ない。久しぶりの旅に心浮かれていたと深く反省しなければならない。

やるか、やらぬか。それが問題だ――。

冬のお台場は寒い！

海に面してるからか、浜風がビュンビュンと吹いている。まさにカップルの熱も冷めるのでは、と思ってしまうくらい風が身に染みる。

「うおおおお」

外に出た俺は、この手荒な歓迎に思わず吠えた。バッドステータス『寒さ×』を所持する俺にとって、この強烈な寒風は精神的にも体力的にも十分萎えさせてくれる。

「この風、地元と変わんないんですけど、マジで」

身を縮込め、防寒モードに切り替える。急に寒くなったから辛くてしょうがない。何気にこっちの方は寒くないだろう、と思ってい

ただけにより一層辛さを感じた。

「そうだね。この風はちよつと辛いね」

知加子も寒そうに身をすり寄せてくる。共に北国育ちのクセに軟弱なのだ。

「どっか入ろうぜ」

「うん」

知加子もかなり堪えているようだったので、即答すると二人して早歩きで一番近い建物の中に飛び込んだ。

「――あつたかいね」

「生き返った気分だぞ」

建物の中に飛び込んだ二人は、若さの欠片も感じさせないセリフを吐く。しかし、思った事をすぐに口にしてしまうのは年を取った証拠だろうか？

お決まりのクリスマスソングが流れる店内には、様々なジャンルのカップルがイチャイチャとラブラブオーラをこれでもか、これでもかというくらいに放出しながら買い物などしている。

違った意味で熱いぞ、ここは。

「ヒロ、少し見て回ろうよ」

クリスマスモードに触発された知加子はそう言つと、俺の腕を取つて立ち並ぶテナントに向かった。

「はいはい」

まあ、別に何しに來たわけでも無いので、俺は深く考えずに軽く答えると束の間の暖気、もといウィンドウ・ショッピングに興じる事にした。

さて、ちょうどイイ感じの小物やアクセサリ類を取り扱う店が並んでる事だし、この辺で海月へのみやげを買っておくか。

（……公的な活動資金は諭吉様が七人。帰りのバス代と都内での交通費で一人、次に会う奴とは飲むから二人は必要だよな……）

脳内予算委員会では、細かな資金の動きを想定し俺一般会計に必要な予算を計上していく。

(……今夜はけっこう使うだろうから、諭吉様は二人から三人は必要だよな……つつ事は、一人か……)

いつも頑張ってる海月には少しでもいいモノ買ってやりたいよな……。

どこか切り詰められるトコは無いか。感謝や愛情を値段で計るわけじゃないが、やはりそれなりのモノをプレゼントせにゃならん。しかし、お高いだけではダメだ。経済的かつセンスがあるモノ。幸い、海月の好みは比較的単純なのでプレゼント候補はすぐに見つけられる。

(……シンプルなモノだからこそ、逆にセンスが問われるんだよなあ……)

俺は普段、パツと見で選ぶ傾向がある。それでも感性が似通っているのか、不思議と海月の好みにピッタリのモノをセレクトするので今まではプレゼントで悩んだ事はなかった。

だが今回は遠出してるから、いつもとは違ったモノを贈りたい。これが頭を悩ませる。

「——ヒロ、何考えてるの？ 彼女へのプレゼント？」

店先で思案に耽る俺の耳元で、不意に知加子が囁きかけた。

「——おわっ」

突然の耳打ちに俺はのけ反る。

いかんいかん。知加子が隣にいる事を忘れてた。

「すまんすまん。ちよつとな……」

なんでか知らないが知加子に悪い事した、と少し反省。

いくら友達とはいえ、今は知加子と遊んでる最中だし他の事を考えるのは失礼だよな。

「……ふーん、そうなんだ。で、何を買うか決まったの？」

「全然決まらん」

首を振って即答する俺。

「まあ、ゆつくり見て回る。いろいろあるから、そのうち見つかるわ」

さほど興味の無い話なのか、その言葉は妙に素っ気ない。そりゃ、自分以外の人へのプレゼントなんて興味無いわな。別に機嫌が悪くなったわけじゃないし、そもそも互いにドライな関係だから気にする必要も無いか。

端から見ると周りのラブラブカップルとたいして変わらないけど、この辺の微妙なトコはアダルトな付き合い故に許されるだろう。

「——ヒロ、私にも何か買ってよ」

何件かテナントを回ったところで、突然知加子がねだりはじめた。店先に並ぶアクセサリーの中に欲しいモノでもあったのか？

「……しゃーないなあ。んじゃ、財政を圧迫しない程度のモノなら買ってやるか。で、チカの欲しいヤツってどれだ？」

「らっき」

よほどゲットしたいモノでもあったのか、知加子は満面の笑みを浮かべて喜ぶ。

「このイヤリングが欲し」な」

指さす先に見えるは、透き通った青い色の小さなイヤリング。透明感のある青が印象的なそれは、さりげなく目を引く出来映えだった。しかもお手頃価格、千五百円。

（……うつ、この女、センスいい……）

財政的に何の問題もないモノをセレクトした知加子のセンスに脱帽だ。

「ほほあ。チカさんは、なかなか良いセンスをしてらっしゃる様ですなあ」

これは“買い”だ。俺は素直にその青いイヤリングを購入する事にした。もちろん、ちゃんと贈り物用のラッピングをしてもらうのは忘れずにね。

「——ではでは。少し早いがメリークリスマス。こんなんでも良け

れば受け取ってくれ」

かわいいサンタのラッピングが施された小袋を知加子に手渡す。知加子は心底嬉しそうな表情で受け取った。そして、ピタツとくっついて喜びを表す。

「ありがとね」

男を悩ます刺激物が俺の腕の感覚を鋭敏にする。ああ、二の腕に押しつけられるプニプニ感がたまらない。

「あは、あははは」

ひきつった笑いしか出て来ない。さりげない感触が俺を悩ます。海月のそれと比べてエロティックな妄想にトリップしそうな自分がいる。

いかん、デレデレじゃないか。周りのムードにすっかり影響されているぞ。少し自分を戒めないと本気で成り行きまかせになってしまう。まいそうだ。

油断大敵ってやつだな。気を取り直して海月へのプレゼントを探そう……。

何軒か店を回り、良いモノ探しの行脚は続く。しかし、条件に見合うブツにはなかなか巡り会えないでいた。

（いろいろありそうなんだけどなあ。コレ、ってやつが無いんだよねえ）

いつもと違ったモノを意識しているせいだろうか、海月のツボにハマリそうなモノが見つからない。

さすがに知加子の手を借りるのは避けたいし、だからといって代わり映えのないモノをみやげにするのは俺のプライドが許さない。やはり、多少の出費は覚悟しないとダメか？

（こうなつなら、災害等緊急時のためにコツコツと貯めてきた“非常事態専用・諭吉五人衆”の封印を解くしかないか……）

災害は、いつ何時起こるかかわからない。この寒い季節、災害なんか起きた日には凍死の可能性だって充分に考えられる。

けっこー災害と縁がある俺は、常に万が一に備えて“非常事態専用・諭吉五人衆”を身につけている。有事の際、やはり物を言うのはお金だから。

実際、知加子の次に会う友人は旅先で大きな地震に遭遇し、想定外の出費を余儀なくされたという。被災地での宿泊費や食費などは意外なほど出費するらしい。災害をいいことに通常よりも多く金を取る不埒な輩も多いためた。よって、俺は常に災害時専用のお金を所持しているのだ。まさに“備えあれば憂いなし”である。

この“非常事態専用・諭吉五人衆”の力を使えば海月好みのプレゼントは買える。しかし、無闇に緊急時のお金を使つて良いものか、かなりケチくさいが、決して裕福でない俺としては大いなる決断が必要なのだ。

（やつぱり、海月には良いモノをプレゼントしたいなあ……今回は特別だ、封印を解こう）

身の安全よりも愛を取る事にした俺。世のカップルが聞いたら、悩む事かよ、とブーイングの嵐だろうな。

使う、と決めてしまえば気分的に探すのが楽になる。

いろんな意味で彼女との差を見せつけられた知加子の冷たい視線を浴びながらも、無事海月好みのプレゼントを見つけた俺は意気揚々とブツをバッグにしまう。

帰るまで災害が起こりません様に。

会計を終えた時、俺は冗談とも本気ともつかない心境で祈った。

15、甘い果実に触れる俺

体も暖まつたし海月へのプレゼントも買った。もうここに用は無
い。だが、時間的に夕食にはまだまだ早いよなあ。さて、どうした
ものか……。

違った意味で暑い店内に留まるのは、ある意味危険である。

その雰囲気にも飲まれてしまう恐れが十二分にあるからだ。ただで
さえ半ば本気、いや、かなり本気で誘いをかける知加子に揺れまく
っている俺にとって、この場所はまさに禁断の果実が豊富に実るエ
デンの園ってやつだから。

「ヒロ、歩き疲れたあゝ。ちょっと休もうよ」

不意に立ち止まると知加子が愚痴をこぼした。

少し拗ねている。まあ、別の女のプレゼントを探すために店内を
散々歩き回ったのだから当たり前かもしれない。

やはり浮かれている部分があるのか。気配りの足りなさを痛感す
る。

「あ、そうだな。んじゃ、少し休むか」

素っ気ない返事で返す俺。

頭ではマズい、とわかっていても簡単に振り切れるほど俺はデキ
た人間じゃない。かといってバレなきやいいや、と割り切れるほど
ダメ人間でもない。

海月を想う気持ちも知加子としたい気持ちも俺の本心だから、な
かなかはっきりとした意志表示ができない。まあ、同じ状況に置か
れたら、男だったら誰もが揺れるだろうが……。

「じゃあ、軽くお茶しますか」

時間的にも余裕もあるし、上の階にいくつか店があったのでそこ

でひと休みする事にした。

……やはりというか、周りの空気はホットだった。

店の内装は赤と緑が基調になったクリスマスバージョンになっている。雪を見立てた飾りが至る所にあり、また店員は皆サンタさんと化していた。いやが上にも気分は盛り上がる。

「……ヒロ、もうすぐクリスマスなんだね」

相方の知加子はすっかりクリスマススムードに触発され、ため息混じりにいいなあ、と言ったくらいにして頬に手を付き熱い空気に浸っている。

「そうだな、クリスマスまでまだまだ先なのになあ」

違った意味でため息を付く俺。

俺にとってクリスマスはあまり嬉しいイベントにならない。クリスマスはウチのお店の年末年始・大売り出しの初日で、そこから早出・残業・休憩無しの三拍子揃った地獄の日々が始まるから。それを思うと素直に喜べない。

それにイベント盛り沢山のこの時期は普段あまり、いや、全然売れてない海月の数少ない繁盛期でもある。地元タレント自体少ないので、広告モデルやミニイベントなどの仕事が一気に増えて人手が足りなくなるため、顔とスタイルの他はキャラが薄い海月でも重要視されるというのだ。そのため二人にとってもクリスマスは世間のカップルの様になれないのである。むなしい時期だ。

「ヒロのお店って年末忙しいんだっけ？ 大変だね」

俺の負のオーラを感じ取った知加子が苦笑する。過去、電話で何度も年末年始の辛さを伝えていたのでそれを思い出したのだろう。

「……せつかくの連休だからさ、今のうちに楽しんじゃおうね」
知加子は静かな口調でそう言うのと微笑んだ。その笑顔に懐かしさと新たな一面を垣間見た。

……ヤバイ。

その笑顔が俺の心にクリーンヒットする。

今、俺の心の天秤が大きく揺れ動き、知加子がどうしようもなく可愛く見える。俺の男センサーがフィーバーしそうになる。今猛烈に、知加子の誘いに乗りたい自分がいた。

貴重な連休だから目一杯楽しまないと。意味合いに若干の違いはあるけど、知加子の言う通り今のうちに楽しんでおこうと自分を納得させた。

「ひと休みしたら、今度は別のトコを見て回ろう。せっかくここまで来たんだ、都会の空気を満喫しようかな」

二人が楽しめる様、軽いデート気分で見てもバチは当たらんだろう。

大丈夫、過ちは起こさないぞ。

俺は自分にそう言い聞かせ、知加子の誘いにほんの少しだけ乗ってみようと思った。

16、カオス・パーク

外に出ると、風はすっかり止んでいた。

冷たい風のせいでもものすごく寒いと思っていた俺だったが、止んでみるとたいした寒さではない。バッドステータス『寒さ×』を持つ俺でも十分に耐えられる気温。要は活動するのには何ひとつ不自由しないというわけで、俺と知加子のお台場散策を妨げるものが無くなった事を意味した。

それはつまり、スナック菓子で“一度食べたら止まらない”に等しく、禁断の甘い果実を一口食べてしまった俺は知加子のペースに乗ってしまう、という意味も含まれていた……。

まるでメトロノームの様に揺れる心。テンポは上がる一方で目まぐるしく気持ちは移ろっている。これは優柔不断の一言では片付けられない、と独りよがりな解釈をしたぐらいにして自分を正当化する……どう言葉を繕っても言い訳にしかないなあ。

「公園に行こ」

俺の微妙な変化を察したのか、機嫌良好テンションアップな知加子。

（この時期の公園は危険だよなあ）

わずかばかりの良心が自制を促す。だが、そのまま行っちゃえばいいと囁く邪な自分が背中を押してくる。

知加子は俺のそんな心の葛藤を知ってか知らずか、俺の手を取り引っ張って行く。その強引さは連んでいた時の彼女を連想させてくれた。そのため懐かしさが先立ち、俺は拒否る事を忘れて引っ張られるがままに海沿いの公園に連れて行かれる。

一分もしないうちに公園に到着。

やはり、というかこの時期の公園はラブラブフィールドと化していた。

視界に入るすべての人達は一足早いクリスマスモードに突入し、互いに愛を語らっている。イチヤイチヤ、ベタベタと人目をはばからずに抱き合っていたりキスをしていたり、さらにはそんな事は部屋かホテルでやれ、と言わんばかりの見ているだけで恥ずかしくなる様な行為に及んでいる輩までいる始末……そんな愛の力オスというべき光景が広がっていた。

「うわっ」

若さ故の大胆さというか、愛のなせる業とでもいうのか、はたまたただ単に周りが見えていないだけっていうか、完全に自分達の世界に浸っている彼等の行動には、さすがに知加子も引き気味になる。「す、すごいね？　ちょっと移動しよ」

目のやり場に困ったのだろう。知加子は少し俯き加減に俺を見る。これでもか、と言わんばかりにラブラブっぷりを見せつけている彼等の行為に、正直この場にいるだけで恥ずかしくなっていた。俺もかなり引いている。

「そうだな。場所を変えよう」

即答すると俺達は、若さ溢れる加減を知らずの輩で賑わうカオス状態の公園を後にした。

17、周囲に溶け込む二人

——クリスマススムードに触発されて理性と欲望の天秤がグラグラと揺れまくった俺は、まんまと知加子ペースに乗っかってしまいデートの定番・公園へと足を運んだ。

クリスマススムード漂う公園はまさに愛の集会所。もしも世界中の人々がこの雰囲気になれるなら、この世から争いは無くなるのではないかと思うくらい様々な愛に溢れていた。まあ、ちよつと過激な愛もあつたが。もしそのまま二人で公園にいたら、間違いなくその足でラブホに直行していただろう。それくらい冬の公園は熱かつた。しかし、そのムードに乗るだけの勢いも若さも失つたいい大人の俺達は、恥ずかしさの方が先立ち公園に留まるのを断念、場所を変えて時間を潰す事にした——。

目の前に見える大きな橋。かの有名なレインボーブリッジというやつか？

テレビや映画でしか見た事のなかったその橋に俺は少し感動を覚える。

周りを見渡せば、相変わらずカップルの群れ。小さな砂浜にズラリと並んでいた。橋の下には水上バスがゆっくりと船着き場へ向かって進んでいる。

陽も暮れてきて辺りが薄暗くなってゆく。なんだかロマンチストにはたまらないシチュエーションになってきている様な気がする。そんな状況中、俺達は適当な場所に腰を降ろして海越しに都会の風景を眺めた。

「……人、多いな」

何を言っているのか悩んだ俺は言われなくともわかる事を呟く。
このまま雰囲気飲まれ、行き着くところまで突っ走ってしまうの

か。そんな思いがあつて迂闊なセリフが言えなかった。

言わなきゃバレないって。俺の邪な部分が悪魔の囁きをする。

いや、やっぱり裏切っちゃダメだ。俺の良心が戒める。

（なんでこんなに悩んでんだ、俺は。ここに来てから完全にペース握られてんぞ。やっぱり、このクリスマススムードに影響されているからか？）

どうも調子が乗らない。いつもの様なノリでかわす事ができない。周りの雰囲気もそうだが、誘ってくる割に急かすわけでも無く“待ち”の姿勢でその気になるのを待っている知加子の態度も俺の決断を鈍らせていた。もっと強硬な姿勢で臨んでくれれば勢いで反発できるものの、キャラに似合わぬ柔軟な姿勢で待たれているのでタチが悪い。

何を言うわけでも無く寄り添ってくる知加子。さりげなく腕を組み手をそつと握る。見た目はすでに周りの人達と完全に同化している。すっかりクリスマススムードに浸っているのか、無言のまま海を眺めていた。

気分はまさに恋人気分。俺は彼女からそんな印象を感じた。

18、揺れて揺られる心の天秤

特に何かを語らうわけでも無く、まったりモードに突入しそうな二人。少なくとも俺は半ばまったりしていた。

その時、胸ポケットにある携帯電話が激しく震えた。突然のバイブに一瞬、俺の体はビクつく。

ポケットから携帯電話を取り出して画面を見ると、先ほど送ったメールの返信だった。

どうやら今起きた様だ。昨日は昼も夜もバイトをしてたし、今朝も俺を見送ってから帰って行ったので今頃起きるのも無理ないわな。それでもちゃんと返信してくれるのだからちよつと嬉しくなる。

メールの内容自体はたいしたものじゃないけど、俺だったら眠さに勝てず返事返さないだろうから。

そう思うと小さな幸せを実感した。

(いかにいかん。まったりしてる場合じゃないよなあ……)

海月からの返信メールが俺を現実に戻す。

きらびやかなイルミネーションが目につく。至るところでクリスマス仕様になっていくからだ。鮮やかな色彩が見る者の心をときめかす。だから皆、普段よりも熱く燃え上がれるのだろう。

冷静に考えてみれば、なんて事ないんだけどやはり俺も少なからず影響を受けている。改めて周りのムードの影響力を知る今日この頃。

危うくクリスマスモードに突入するところだった。なんだかんだ言っただけ崩し的な展開にハマっている自分に思わず苦笑してしまいがちになる。まだまだこれから長いのに、今からこれでは先が思いやられる。もっと自分を戒めないと……。

「チ力、そろそろメシでも食おうか？」

時間的にもいい頃合いだ。このままこの場所に留まる危険性を考

慮すると、一旦場所を変えて気分転換を図るべきだ。

消え入りそうな良心の欠片が背中を押しまくる。ずいぶんと往生際の悪い足掻きにも思えるけど、現状を考えるとこれが揺れ動く心で出来る精一杯の抵抗だ。この気持ちがいっままで続くのか微妙な気もするが、環境が環境なだけに今は理性を奮い立たせていくしかない。

「……うん。じゃあ、行こっか」

現実に戻された格好の知加子は小さく頷くと絡めた腕を離し立ち上がった。

「ヒロ、食事するならいい場所あるのよ。そこでいいかしら？」

妖しくも艶やかな笑みを浮かべながらそう言つと、立ち上がった俺の手を取り軽快な足取りで砂浜を後にした。

19、アクア・リンク

いったいどこへ行くんだ、と思いつつも知加子の後に続いて先ほど入った場所から少し離れたところにある建物の中へ入った俺。

無言のままエスカレーターに乗り、何もわからぬ俺を最上階まで連れて行く。どうやら知加子の言う“いいお店”はこの建物の一階上の階にある様だ。

相変わらずの人集りの多い通路を抜けて奥へ行くと一軒の店があった。

アクア・リンク——それが店の名前だった。

「——ヒロ、ここだよ」

知加子は店の前で俺に振り返ると満面の笑みを浮かべる。

有名なトコなのか？

俺はその笑顔の意味がよくわからず、返す言葉も無くただ頷いた。

「——いらっしやいませ」

店に入ると店員はやけに恭しく丁寧に迎えてくれた。

その店員の態度に俺はなんか場違いなトコに来てしまったなあ、と思わず知加子の方に目を向ける。だが、そんな俺の視線を知ってか知らずか知加子はバッグから一枚のカードを取り出すと店員に手渡した。

手にしたカードを見た店員は、これまた丁寧に頭を下げてる。

「御予約の近江知加子様でしたか、お待ちしておりました。アクア・リンクへようこそ」

いったい、なんなんだ？

さっぱり意味がわからない俺は、案内されるがままに店の中へと入っていった——。

「……どういう事だ？」

俺達の案内された席は、他の客のいるスペースから少し離れた奥まった場所にあった。

そこは、これでもかというくらいのクリスマス仕様では無く、個室みたいに軽く仕切りがあり“二人だけの空間”を演出した落ち着いた感じのゆったりスペース。しかも座る席は片側しか無く隣合う様になっている。それに加えて夜景の映えるベストポジション。

……これは完璧にカップル専用スペースと言えよう。

わざわざこの店の、この席を予約したのか、この女は。

俺はその用意周到さというか、策略というのかわからないが知加子の意気込みの様なものを感じてしまい、半ば呆れ気味に隣の知加子を見やった。

「久しぶりの再会なんだし、ちょっとイトコでディナーもいいかな、って思ったのよ」

コートを脱ぎながらしれっとした態度で答える。そして、呆れ顔の俺を尻目にメニューを広げて俺の前に差し出し、それから手拭きで丹念に手を拭く。

「お酒飲もつかない。ヒロも飲むでしょ？」

手拭きをテーブルの端に置いてメニューをめくり、俺の方にじり寄る様にしてアルコール欄を覗く。

「私、ピーチにしようかな。ヒロは何にする？」

そう言っただけを密着させる知加子。二の腕に柔らかな感触が当たる。

素敵です。素敵ですが、お姉さん、行動が大胆ですよ？

窓の外に広がる夜景に目を向けて意識を逸らそうとするが、男子たるものマシユマロみたいな素敵な感触を無視する事などできないのです。

「……俺はライムで」

俺の頭の中には“離れる”という選択肢は無く、それを意識しつ

つも言われるがままに酒を注文する。

「はいはい。じゃあ、注文するね」

知加子はテーブルの上に置かれたボタンを押すと、俺の方にさらに体を密着させてきた……。

——長い夜はまだ始まったばかりである。

20、宴の始まり

さすが予約しただけの事はある、ここから見える夜景はとても美しい。

都会らしい華やかな人工の光が街を彩るも、遠くから眺めるとまるで星の煌めきが如く清らかで神々しく見えるから不思議だ。

いかにもイベントです、みたいなクリスマス仕様の派手な場所よりも、静かでゆったりとくつろげるこの空間の方が落ち着ける。

その絶景を眺めながらのディナー。にくい演出だと思いつつも俺は心の中で知加子に感謝した。

「——かんぱい」

注文が届いたところでさっそくグラスを合わせる二人。無言でお酒を喉に流し込む。

歩きまわって疲れた体にアルコールが程良く染み渡る。

旅の疲れを取るには、やはりお酒が一番だ。

「うーん、疲れた体に染み渡るなあ」

俺はそのままグラスを一気に空ける。景色は最高だし酒も旨い。

疲れているせいか、いつもより酒が進む。

ふと隣を見れば知加子もグラスを空け、メニューを見て二杯目を選んでいる。

……そう、知加子は半端じゃなく強い。飲みに行くと必ず俺の方が先に潰される。冗談抜きで酒豪なのだ。

「ヒロ、もつと飲むでしょ？ 何にする？」

平然と笑顔で二杯目を進める知加子。

ペース配分に気をつけないと間違ひなく潰される。だが、疲れた体は酒を求めていた。

「同じやつで」

答えると同時に空のグラスをテーブルの端に置いて、俺は背もたれに寄り掛かる。革張りのソファーだがあまり堅くない。

俺は伸びをして体をほぐす。その時、思わず声を漏らしたのは可愛嬌だ。

「ヒロ、おじさんだなあ」

口元に手を当てて笑みを浮かべ、少し皮肉めいた口調で俺をからかう。

何かをする度にいちいち声を上げるのは年を取った証拠。実際、年取ってるから俺は反論する気にもならない。

「ああ、俺はおじさんだよ。来年、三十路を迎えるおっちゃんだよ」

そう言つて再び伸びをする俺。体がほぐれて気持ちいい。

「あゝ、気持ちいいなあ」

完全におじさんと化した俺は開き直る。伸びをしては声を上げ、軽くストレッチしたりと体を動かす。

「……まだ若いでしょう」

知加子は呆れ顔で俺の腹に突きを入れる。軽く急所に入ったその突きに俺は声にならない呻きを上げる。

——そんな絡みをしてる間に店員が料理を運んで来た。ちよつと贅沢なコースを注文していたので、テーブルの上にたくさんの料理が次々と並べられていく。

注文の際、一度に持つて来る様に頼んでいたのでテーブルの上は大渋滞だ。

……たくさんあるなあ。

種類が多めだから、それぞれの量は少ないと思っていたのにそうでもない。

いい意味で期待を裏切ってくれたつてやつだ。

これだけあれば追加注文せずに済む。いちいち選んで注文するのが面倒な俺としては有り難い事だ。まあ、飲み物だけはその都度注

文しないといけないがね。

「……さて、とりあえず酒の追加注文でもすっかな——すいませーん、ライムひとつ下さーい」

「——あとピーチひとつ」

俺の後にすかさず声をかける知加子。

なんだ、じつとメニューを見ているから、てっきり違うのも頼むと思つたら結局同じかよ。

まあ、いいや。

俺はポケットから煙草とライターを取り出し、至福の一本に火をつけた。

「ヒュー」

煙くゆらす俺に向かって知加子は抗議の声を上げる。

「けーむーいー」

そして、わざと顔を近づけて鼻をつまむ仕草をする。

「チカ、至福の一服させてくれよ」

煙を知加子の反対側に吐いて嘆願する俺。

ここは譲らんど。せつかく気分が良くなってきたんだ、ここで喫煙なんぞした日には、やる気ゲージも下がるというもの。

頬を膨らませて抗議の眼差しを向ける知加子を見無視し、俺は構わず煙を肺に入れる。

「……もう、仕方ないなあ。私に煙かけないでよお」

俺の頑なな姿勢を察した知加子は、半ば呆れ気味な表情で妥協案を提示する。

「了解」

おっしゃあ！

心の中でガッツポーズ。むくれたらどうしようかとちょっと心配だったが、簡単に了承を得た事にやる気ゲージが1ランク上がる。

……おっと、すでにピンクだったな。

——何故かテンションの高い俺。今からこの調子でいいのか？

久しぶりだからいいか。俺は無理矢理自分を納得させると、至福の一服を堪能しながら酒が来るのを待った。

21、酔っぱらい

窓の外に映る夜景が、旅の疲れを癒す極上の酒の肴になっていた。テーブルの上に並べられた料理にはほとんど手を付けず、慣れ親しんだ紫煙と酒ばかりを体に流し込む。

余計なものは口にしない。そんな訳のわからない理屈をこねながら、気分良く下らない話で盛り上がっていた。

特に、昔話は盛り上がる。懐かしさに気分も高揚し、いつもより飲むペースが早い事にも気づかない。

喋れば喋るほど喉が乾き、喉を潤そうと酒を飲む。飲めば飲んだでテンションは上がり、さらに話に夢中になる。

——気がつけば、完全に酔っぱらい状態。

頭が回らない。ついでに舌も回らない。いい感じの酔っぱらいの出来上がりだ。

「……チ力、俺酔った……」

頭痛も吐き気もしないが、体がふらつき思考が定まらない。俺は体の揺れを感じながらも隣を見た。

「——あら？ ヒロ、もう酔っちゃったの？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、知加子は俺の耳元に唇を寄せて息を吹きかける。

「……うん……」

生温かい吐息が耳にかかり、甘い香りが鼻腔をくすぐる。ぞわぞわっと背筋に鳥肌が立ち、思わず身震いしてしまった。

そんな俺の反応に知加子は鼻で笑いながら身をすり寄せる。

「ふふふつ、もう飲めないんじゃない？」

そう言ってさらに挑発的な眼差しを俺に向けてくる。

意識はまだはつきりしていたが、舌がうまく回らないので反論もできない。

口で無理なら、とせめてもの抵抗だとばかりに俺はテーブルの上に置いてある煙草を手に取り、おぼつかない動きで一本抜き取って口にくわえる。そして、火をつけようとライターを取ろうと手を伸ばす。

「ああ……」

しかし、体が思う様に動かないためライターを取り損ねてテーブルの下に落としてしまった。

「……どこいったんだ？」

視線を落として足元を見るもライターがない。いったい、どこに消えたというのか。

酔っぱらい状態の俺は判断力も低下、そのまま身を屈める様にしてテーブルの下に腕を伸ばした。

足元にはない。酔いのせいで焦点も定まらない俺は床に届くぐらゐに無造作に腕を伸ばす――。

ガンッ！

「――あだっ」

勢い余ってテーブルの端に頭をぶつける。一瞬、目の前が真っ暗になった。

「……ヒ口、大丈夫？」

頭をさする俺を見つめる知加子。その表情は先ほどまでのものとは変わり心配そうな眼差しになっていた。そして、おもむろに手を伸ばすと痛打した箇所を撫でてくる。

「よしよし。痛い痛い、飛んで行け」

まるで幼児をあやす様に何度も俺の頭をさする。

……いかん、場が引いてきたな。せつかく盛り上がっていたのに……チ力、悪いな」

いくらか痛みが引いてきたので頭を上げて謝る。だが知加子は首

を振り頭を撫で続けた。

「気にしない気にしない。さ、飲みなおそうよ」

知加子はそう言って空いた手にグラスを持ち、俺に向けて笑みを浮かべる。

……飲み過ぎに注意しよう。いくら長旅の疲れもあるとはいえ、少しペースが早かったかもしれない。

もう手遅れの様な気もするが、俺は飲み過ぎない様に気を配りつつ追加で酒を頼んだ……。

22、止まらない気持ち

飲む。ひたすら飲む。沈みかけた場を盛り上げようと酒をあおる俺。

飲み過ぎない様に、と思った矢先から追加注文の嵐。これは知加子のペースに合わせて飲んだためだ。

知加子がイけるクチである事は知っていた。しかし、ここまでザルだったとはまったくもって知らなかった。

意識は朦朧、かろうじてグラスと煙草を持つ事ができるぐらいにしか体は言う事を聞いてくれない。そんな俺に冷静な判断力などない。

「ヒョロ、大丈夫？」

首を傾げる様にして俺の顔をのぞき込む知加子。

「……だーいじょおうー」

回らない舌で返す。

頭がクラクラしている。無意識にグラスを手にするが口に運ぶ事ができない。

「ヒロ、無理しちゃダメだよ？ 夜は……まだこれからなんだから、ね？」

悪戯っぽく笑みを浮かべながら小さく囁きかける。

不意に知加子の顔が間近に来了。甘い吐息が鼻にかかり、俺は返す言葉も無く頷く。

朦朧とした意識の中でも、身を寄せて来るのがはっきりと認識できる。

「ヒロ、寝そうなの？ こっち見てよ……」

耳元に優しく息を吹きかけ、悩ましげな声で囁く。

言われるがままに顔を向けると、互いの鼻がかすかに触れ合う。視線もぶつかる。その目に知加子の思惑が浮かぶ。

だが、今の俺には為す術も無い。いや、はじめからこうなる事を密かに望んでいたのかもしれない。だから俺はここまで無防備になり、かつ彼女の接近を許したのだらう。

——ゆっくりと顔が近づいて来る。目の前が暗くなったと思った瞬間、唇に柔らかな感触を感じた。

完全な酩酊状態の俺は、それを受け入れるとか拒むとかを考えるだけの思考力はすでに無い。脱力する体と薄れゆく意識に己の限界を感じ、そのまま身を預けると静かに目を閉じた。

——目を開けると落ち着いた雰囲気を醸し出す木目の天井が見えた。

後頭部に生暖かく柔らかな感触を感じ、視線を少し動かすと知加子が黙々と酒を飲んでいる。

どうやら寝てしまった様だ。しかも膝枕されている。頭がクラクラするうえに体に力が入らない。いくら旅の疲れがあるとはいえ、なんだか情けない気持ちになる。

見上げる様にして知加子を見る。その飲みっぷりに俺はあの頃とたいして変わっていないのでは、とふと思った。

舌が回らないので無言のまま見上げていると視線を落とした知加子と目が合う。

「まだ寝てていいよ」

そう言って手を伸ばし頭を撫でる。時折、髪の毛をいじりながらあやす。そして、顔や首筋などにも触れはじめた。

巧みな指づかいで愛撫するかの様にさすってくる。少しくすぐったい。気持ち良すぎてこのまま寝てしまいそうになる。

俺は目を閉じてされるがままになった。

「どう？　気持ちいい？」

優しい声とは裏腹にその指先を首筋からシャツの縁をなぞる様に

踊らせ、ゆつくりと胸元へ滑り込ませる。

それと同時に空いているもう片方の手が俺の唇を塞いだ。

「口を開けて」

淫を含んだ瞳を少し潤ませながら有無も言わさぬ口調で俺の唇に指を差し込む。そして、少し強引に啞内に侵入した指で舌を弄ぶ。その巧みな指づかいに、俺は不覚にも興奮しはじめる。

「ヒロ、私の指も舐めて」

声からして知加子もその気になってきているのがわかる。酔いのせいもあるが、ここまで来たらもう行くトコまで行くしかない、と半ば開き直りにも似た気持ちになった俺は目を開き知加子に合図を送る。

その意味を察した彼女は顔を上気させ、ゆつくりと指を引き抜く。「まだ歩けそうない。もうちょい楽しんでから行こう……」

俺は掠れ気味な声で返すと知加子の腰に腕を回し下腹部に顔を押しつけた。

服越しにもそこが熱を帯びているのを感じる。俺は腕に力を込めて強く抱きしめる様になると、知加子の体がビクンツと一瞬震えた。

「ヒロ、ここでしちゃうの？」

少し焦り気味に声を上げる。その声に艶やかなモノを感じた俺は、腰に回した手を踊らせてスカートの縁から指を忍び込ませた――。

23、目覚めた後…（前書き）

性描写あり。18禁です。

23、目覚めた後…

……心地よい脱力と気だるさを感じながら俺は眠りから覚めた。
しかし、まだ瞼が重くて目を開ける事ができない。

頭の痛みは無い。重くは感じるが動けないほどでは無く、もう少し休めば回復するくらいだ。

意識は次第にはつきりとしていく。それと同時に体の感覚も元に戻る。

暖かく、柔らかな弾力を胸元に感じた。

本能的にその正体を察する。これは、間違いなく男には無い代物である。

（やつちまったな、こりゃ……）

一眠りしたおかげで体の感覚は完全に回復。

背中には柔らかいシーツが当たっており、首元に寝息がかかる。さらに俺は裸だ。

目を閉じた状態でも、自分の状態及び置かれた現実を瞬時に把握した。

……酔った俺は知加子とラブホテルに来てしまったのだ。

しかも今、裸の知加子とベッドで寝ている——つまり、一戦やらかした後だ。俺の胸元には覚えのある双丘の感触が熱くなっているから間違いない。

まさか、本当に寝てしまうとは……俺は急に罪悪感を覚え、早くこの場から立ち去りたくなった。

「……ん、うゝん……」

俺の体の上で声を上げる知加子。どうやら目覚めた様だ。

首元にかかる圧力が無くなる。おそらく顔を上げたのだらう。

「ヒッ口」

甘い吐息が鼻にかかると同時に柔らかな感触が唇を塞ぐ。
寝たふり状態の俺はなんとかやり過ごそうと反応しない様に意識を集中させる。

しかし、知加子は俺が寝ている事などお構いなく唇を吸いながら口内に舌を侵入させていく。

俺の首に手を回し、舌を絡ませて優しく吸いあげる。

（ヤバイ）

俺の意志とは裏腹に体はそのキスに急激な反応を示す。無論、俺の上にいる知加子はその変化に気づく。

一旦、唇を離し体を動かし俺の上に跨る格好になった。劇的な進化を遂げた俺の体にピッタリと自分の体を重ねる。

少しでも動いたらヤバイ体勢。

その格好のまま知加子は再び唇を合わせた。

（……ヤバイ。非常にヤバイ。マジ入れたくなる……）

巧みな舌の動きが性欲を刺激する。

そして密着した体を少し浮かせ、俺の手を取ると自身の双丘に導く。柔らかな弾力の中にある硬直した部分が俺の理性を激しく揺さぶった。

知加子は追い打ちをかける様に俺の手を取り自身の双丘を揉みはじめる。さらに俺の体で劇的な変貌を遂げた部分に自身の一番熱くなった部分を押し当てる様にして腰を下ろす。知加子の体も準備完了状態になっている。

だが、かすかに当たる位置で止める。

「——ヒ口、私の中に入りたい？」

唇を離し耳元で囁く知加子。

（こ、こいつ、俺が起きてるの知ってたのか……くっ、ここまで欲情させられては我慢できん！）

俺は目を開けると知加子の胸から手を離し、くびれた腰に手を回す。

視線を向ければ知加子は顔を上気させて目を潤ませていた。

「——チカ、行くぞ」

俺はそう言つて腰に回した手をお尻にスライドさせた。その瞬間、知加子の体がビクツと震える。

「ああんっ」

その声が俺の欲情に火を点ける。

俺は両手でお尻押さえ、かすかに触れる互いの一番熱くなった部分を密着させる様に抱き締めた。

「——んんっ！」

その瞬間、知加子は甘い声を上げる。しかし、すぐに俺は唇を塞ぐと舌を絡ませながら激しく知加子を責め立てた……。

24、海に見える公園で

——シャワーを浴びて着替えを済ませたところにフロントからのコールが来た。そのため、余韻に浸る時間も思い悩む時間もないまま慌ててホテルを出た二人。

外は、明るくなりはじめていた。

とりあえず海を見渡せる公園に行く事に。その間、俺は無言だった。

言い訳にしかないが、その時の記憶がほとんどなかった。それでも、目が覚めてからの記憶ははっきりと覚えている。

自分のした事に何を話していいのかわからなかった。

知加子もまた無言のまま歩いている。だが、俺と違っていまだに余韻が強く残っているみたいだった。俺の腕にしがみついて歩き、しかも時折体を震わせていた。かなり消耗している様で、公園に着きベンチに腰掛けた時には完全に俺に身を預けてしまう。

そんなに激しかったのか？

その脱力し切った姿に俺は声を掛けるタイミングを逸してしまい、ポケットから煙草を取り出すと火を点けて遠くに映る朝焼けを眺めた……。

冬の朝は寒い。しかも海が目の前だからか、風がやたらと冷たく感じられる。風呂上がりの体にはかなり堪える。

公園には誰もいない。昨日の賑わいが嘘みたいだ。それが寒さを一層引き立てている様に思えてならない。

そんな事を思いながら紫煙をくゆらせ知加子を見る。

終わってから一時間も経っていないとはいえ、まだ余韻を残しているのか、ひどく恥ずかしげな表情を浮かべてあちこちに視線を走

らせている。

「——チ力、寒くないか？」

俺の声に知加子は一瞬ビクツと体を震わせた。そして顔を赤くして俺の方に振り向く。見つめる目が潤んでいる。

まだ疼きが取れていない様だ。

「まだ体が疼くのか？」

唇を耳元に寄せて囁く。知加子の顔は真っ赤になり、目に涙が浮かぶのが見て取れた。

「ヒロ！」

凶星を突かれた知加子は顔を真っ赤にして俺の肩を叩く。

……おいおい、なんだか可愛く見えるぞ。いつからそんな乙女チックなキャラになったんだ？

まるで初恋の相手と初めてキスした様な、そんな感じの態度の知加子に俺は、行為に及んだ現実を柵に上げて純粹にいじりたくなつた。

エス心が頭をもたげ、さらに羞恥心を煽る言葉を囁かせる。

「……チ力、もしかしてもう一回戦したかったりする？」

言葉とともに熱い吐息を吹きかける。

知加子は両手を膝の上に乗せ、そっぽを向いて反応を隠す。その仕草が妙に可愛く見えて仕方無い。

俺は肩に手を回して抱き寄せ、顔に手をやってこっちを見させる。

「チ力、なんか言えよ」

至近距離の位置で視線を絡める。

潤んだ瞳には溢れんばかりの涙。その目に俺は不覚にもドキツとする。

「……ヒロの意地悪。あんな恥ずかしい事しておいて、まだ足りないの？」

知加子は顔を赤くしたまま掠れた声で答える。

「……私が恥ずかしがってるのは、こぼれてるからよ……あれだけ出されたんだもん、動きたびにこぼれちゃうの……恥ずかしくて

しょうがないのよ！ ヒロ、触ってみる？ 私のここ、すごく熱くなってるよ」

少し怒った口調でそう言うのと視線を逸らしスカートに手を当てる。「まさか、シャワー浴びてからされるなんて思ってたわ…」

知加子は俺の手を取るとため息を漏らした。

……だんだんと日差しが強くなっていく。この寒さの中にと、温度が上がっているのが体感できる。

もう予定の無い二人。本来なら飲みの後どこか（台場だから海か？）を散策し、ラブホテルじゃないにしてもそれなりに観光気分を味わえるところで泊まるはずだったであろう予定も、飲みからホテルに直行したために大幅なスケジュール調整が必要となってしまった。

少なくとも、知加子はこんな朝早くに外に出ているとは思っていなかっただろう。しかも歩き回れる状態じゃないときた。知加子がむくれるのも仕方が無い事だ。

「……ヒロ、これからどうする？ まだ七時前よ……あゝ、泊まりでエッチするんだったらウチですればよかったのに。今からじゃ時間早くてどこにも行けないよ？」

ようやく本来の自分を取り戻した知加子は、俺の腕に絡みついて悪戯っぽい口調で責める。

「たしかに。ぶっちゃけ、俺もチカと寝るとは思わなかったよ。浮気する気はなかったんだけどなあ……いや、予定潰してすまん」

俺は知加子に謝った。寝た事に対して、というよりも、せっかくの旅の思い出をフイにしてしまった事に自分のふがいなさを感じたからだ。

「ふふふ、エッチした事ならいいのよ。私から誘ったわけだし、それに十分に満足させてくれたもん。それに関しては謝らなくてもいいわ。私が言いたいのは、時間が早すぎるってこと。ご飯食べる

のも早いし遊びに行ける場所もない。今から私のウチに行くにしてもここからじゃ遠い。かといって、このまま別れるのはもつとイヤだなあ」

その表情にまだ少し赤みを帯びてはいるが、笑顔を見せてそう言う顔と顔を離れた。その行動にかなりの至近距離だった事に気づき俺は思わず照れてしまう。

今さらながら自分のしてる事が大胆になっていた。いくら寝たからといって少し気分が浮ついているみたいだ。ちよつと気を引き締めなければ……。

急に罪悪感が芽生え、自分を戒めたところに少し恥ずかしげな口調で知加子が囁きかけてくる。

「——それにしてもヒ口、ずいぶん溜まってたね？ でも、あれだけ出したんだから満たされないなんて言わないよね。だからラブホには行かないからね」

追い打ちをかける様に茶化す知加子。調子は完全に戻った様だ。そして、彼女はバッグから腕時計と観光ガイドブックを取り出し、ページをめくってこれからの行き先を思案する。

俺の数少ない知識では築地しか思い浮かばない。まあ、あそこなら朝一から行けるが……市場に行ってもイベントにはとても遭遇できそうもない。よって、知加子の思惑など知る由もなかった。

「仕方ないなあ……ヒ口、とりあえず移動しようか」

ガイドブックから目を離しページを折る。知加子の中でどうやら行き先が決まったらしい。

「了解。どこでもついて行きますよ」

無論、断る気などない俺はおとなしく彼女に従うだけだ。

「じゃあ、さっそく行こつか——つと、その前にトイレに行かせてね」

知加子は立ち上がり、俺の手を引っ張って立たせると先ほどとは打って変わって元気よく歩き始めた……。

25、やる気ゲージMAX！？

今日で俺の旅も中盤に差し掛かる。

この旅の目的である“友人との交流”も午後からは別の人物に切り替わり、これまた違った首都観光と相成るわけで。

知加子とはアダルトな夜を演出してしまったが、次なる人物に関してはそういった間違いが起こる要素はまったく無い。まあ、相手は男なのだから当たり前と言えは当たり前なのだが……。

そんな事を思うほど、昨夜は知加子とディーブな夜を過ごしてしまったらしい。酔っていてその時の記憶が曖昧なのだが、知加子の反応や朝起きてからの行為により俺は自分にいまいち信用が置けなくなつたのだ。

さて、これからどうするか。予定では知加子と一緒にいるのは昼ぐらいまでだ。時間にすると、もう六時間を切っている――。

知加子に引つ張られる様にして公園を出た俺。

観光ガイドブックから次の目的地を決めた知加子に誘導されて来たのは、車窓からの景色は格別なのだが座り心地があまり良くないあのモノレールの駅。

着いた早々知加子はトイレに駆け込み、残された俺はとりあえず自販機で缶コーヒーを買い、風で冷えた体を暖める事に。

10分しても戻らなかつたので煙草でも吸おうと思ったが、タイミング悪く知加子が戻って来て断念。やけに遅いと思ったら、どうやら化粧をしていた様だ。

缶コーヒー片手に券売機で切符を買ってそのままホームへ。

朝だからか、人はまばら。ラッシュはもう少し先みたいだ。ガラスだかプラスチックだかの壁に映る自分の目にクマを発見し、ゲン

ナリしながらモノレールを待つ。

しばらく待っているとモノレールが到着。乗客もまばらで悠々と窓側の席を奪取する。

やはり乗り物は外を見ながら快適に過ごしたいもの。狭いボックス席に向かい合う様に座り、二人は暫しの間車窓の景色を堪能した。

知加子に連れられて来たところは、スタート地点である新宿。一瞬、もう帰るのかと思わず勘繰ってしまう。

駅の外に出て、昨日まったり一服タイムに興じた喫煙所に辿り着く。とりあえずベンチに腰掛けて一本火を点ける。

へビーな俺は、隙あらばニコチンを摂取する癖がついているのだ。「……確かヒロの友達って、私と同じ江戸川区に住んでるんだよね？」

至福の一時を堪能する俺に不意に問いかけてくる知加子。

「ああ、そうだよ。久しぶりで記憶が曖昧だが、浦安に近いところだったかな。まあ、都営地下鉄よくわかんないから、会う時はいつも新宿で待ち合わせてるよ。それがどうした？」

デイズニールランドに近い、と聞いているので浦安近辺のはず。

だが、都会の地理に疎い俺を考慮し待ち合わせはここ新宿にしている。なので、実を言うと友人の住む詳しい場所はわからなかったりする。

それを聞いた知加子は頷くと身をすり寄せてくる。

「ちよつと考えたんだけどさあ、だったら直接会いに行ったらどうかな？　ウチからだと同じ区内だからバスで行けるでしょ。ご飯食作ってあげるからウチに来ない？」

知加子はそう言ってニツコリと微笑む。

移動の手間と費用、それと知加子との時間を考慮すればその案は最善策の様に思える。しかも食事付きなら尚更だ。

どっちにしても会ったら、まず友人宅に荷物を置きに行くわけだし、直接行った方が時間的にも経済的にもお得だ。それに移動だけ

でも何気に体力を消耗するから、知加子の提案はまさに一石二鳥と言える。

「そう言えば前に近いって言ってたもんな。よし、そうしよう。善は急げ、さっさと行くぞ」

俺は煙草をもみ消すとベンチから勢いよく立ち上がり、知加子の手を取ると早足で駅に向かう。

今から行けば、部屋でまったりと体を休めて午後から余裕を持って行動できる。そう思うと自然とテンションも上がっていく。

「ヒロ、急にどうしたのよ……あ、まさか、ウチでする気じゃないでしょうね？」

引っ張られる様にしてついてくる知加子は大胆発言をする。

いや、さすがにそれはないから。

俺は首を振って否定する。そして、人混みが増えてゆく改札口へとまっすぐに歩いて行った。

26、着いた先は懐かしい場所

階段を降りるとちょうどよくホームに電車が到着する。それに駆け込み、つり革に捕まって混みはじめる車内で揺られる二人。まだラッシュには程遠いが、それでも座席は埋まっており“都会の朝”を体感する。

乗った電車は都心とは逆方向に走っているのにも関わらず、各駅に停車する度に人の乗り降りが激しい。

今でこれだ。ラッシュのピークになったら、いったいどれだけ凄まじい光景が見られるのか。想像すると見たい様な見たくない様な、そんな複雑な心境になる。

目指す場所は知加子のお家。過去、東京で何度も会ったいるのだが、その時はいつもお泊まりやオールだったので実は一度も部屋に入った事はなかったりする。

まだ時間帯も早い事から車内は学生の方が多い。

つり革に捕まって参考書を読む学生の姿に、俺はどことなく違和感を覚える。完全に独断と偏見だが、都会の学生は皆チャラチャラしていると決めつけていたせいだろう。

悲しいかな、この発想からしてすでにおじさんである。

周りを見ると他の学生達も参考書片手に勉強に勤しんでいた。

「……期末テストが近いんじゃないの」

学生達に目を向けている事に気づいた知加子が合いの手を入れる。そうか。もう12月だもんな。

その言葉に納得した俺は頷くと窓の外に視線を動かした。

都営地下鉄というだけあって、車窓の景色は望むべくものはなかった。それでも新宿線はまだ良い方かもしれない。

23区のかなり端の方の駅で俺達は下車。駅を出るとやけに寂れ

た下町っぽい景色が飛び込んできた。

「ここ、前に通ったなあ……」

以前、都営バスでこの駅の前を通った事がある。

目の前には小さな花壇とやけに哀愁漂う古びたバス停。以前と変わらぬ姿がそこにはあった。

都会の匂いがまったくしない街。その都会らしからぬ雰囲気が、俺の記憶にはつきりと刻まれていた。

「えっ？ ヒロ、ここに来た事あるの？」

俺の呟きに知加子は驚いた表情を浮かべる。観光にはまず来ないであろうこの街を知っていたのだから、知加子が驚くのも無理はない。

俺だって友人と“下町巡りのバスツアー”を敢行しなければ、まずお目にかかる機会などなかっただろうし。

「ありきたりな場所に行ってもつまらんだろうって友達に言われてな、“下町巡りのバスツアー”という企画を立てて友達と下町をバスで旅したんだよ。その時、ここを訪れたんだ」

それにしても知加子の住む街だったとは。友人と知加子には何の接点も無いのに……その偶然に俺は不思議な気持ちになった。

「ふーん、相変わらず下らない事してるんだ」

少し冷めた目で俺を見る知加子。残念ながら、彼女にはこの企画の素晴らしさがわからないらしい。

俺は苦笑しながら思い出に残る街並を眺める。

ここから友人の住む街は近い。つまり、それは時間に余裕ができた事を意味した。

「じゃあ、さっそく知加子の部屋にお邪魔するか。ここからは近いのか？」

懐かしい雰囲気になんとテンションは上がっていく。

「近いよ」

そう言うのと知加子は俺の手を取って歩き出した。

人の数が少ないので、よそ見をしながら歩いてもぶつかる心配をしなくても良い。

いかにも下町といった風情の通りをゆつくりと進む。しばらく歩くと通りを左に曲がる。さらに閑静な佇まいに俺は、思わず都会にきている事を忘れそうになる。

——この街の雰囲気になぐわない真新しいアパートが目飛び込んできた。周りに建つ古びたアパートとは明らかに違う。

そのアパートの一階の部屋に連れられる。どうやら知加子の部屋はこらしい。バッグから鍵を取り出してドアを開ける。

「目立つから覚えやすいでしょ？」

知加子はそう言って中に入る。何気に見回すと玄関は綺麗に片付けられており整理もしっかりされていた。

……上京する前に住んでいた部屋とは大違いだ！

どちらかというと大雑把な性格の知加子は、男を部屋に入れる時間でさえ平気で部屋を散らかしていたので俺は一瞬目を疑ってしまう。

「ヒロ、何してるの？ 早く上がってよ」

玄関で立ち尽くす俺に悪戯っぽい笑顔を向けて手招きする。

何が知加子を変えたんだろう。

俺はそんな事を思いながら靴を脱いで部屋に入った。

27、朝食はシンプルに

『直接来るだど？それは構わないが、一人でちゃんと来るのか？（笑）まあ、お前がそう言うなら連絡がくるまで俺は部屋に居るとしよう。駅に着いたらメールくれ』

俺は子供か！？

直接行く事を友人にメールで伝えたら、こんな返事が返ってきた。しかし、前に首都来訪した際、地下鉄で登る階段を間違えて駅で迷ってしまった事があったので、バカにされても文句を言える立場にはなかった。

あの時は本気で迷子になってしまったから、実を言えば一人で移動する事にちよつとしたトラウマを抱えていたりする。

情けない話だ……。

少し屈辱を味わった俺は携帯をポケットに戻し、荷物を置いて床に転がる。まるで自分の部屋にいるかの如くりラックスする俺。

「ヒロ、簡単なのでいいでしょ？」

知加子はそのな俺に冷ややかな眼差しを向けつつコートをハンガーにかけてキッチンへ向かう。

「ああ、軽いのでいいよ」

料理も苦手だったはずなのに。やはり、時は人を変えるんだな。そんな事を思いながらゴロゴロとくつろぐ。

——テレビはニュースしか放送していない。朝から面白い番組を期待してはいけない。

暇を持て余す俺はチャンネルを変えては同じ様なニュースを黙っ

て見た。

「——ヒロ、起きてよ。せっかく作ってあげたのに何寝てんのよ！」

俺の頭を小突きながら知加子が文句を言う。

あまりにも暇だったので寝てしまった。

「すまんすまん。まだ疲れが取れないみたい」

頭を掻きながら謝る。中途半端に寝てしまったのでまだ頭がボーっとする。

「ホント、年寄りくさいなあ……さ、早く食べよ」

「ああ」

力無い返事をしてテーブルに並べられた料理を見る。

トーストにスクランブル・エッグ、それにサラダとオレンジジュース……実にシンプルな朝食だ。

「へえ」

テーブルを軽く叩きながら驚きの声を漏らす。もっと単純なものが出ると思っていたのでちょっと感心した。

「ちよつとお、何感動してるのよ？ 私だって料理ぐらいするわよ。私のこと、どういう目で見てたのよ……」

頬を膨らませてくれる知加子。その表情に俺は思わず笑ってしまふ。

「ひどいなあ」

悲しげに呟くとため息を漏らす。何気に落ち込む知加子を見て、俺はちよつと可哀想になり肩を叩いて慰めの言葉を投げかけた。

「いや、すまんかった。なんだか家庭的になったって言うか、大人の女になったって言うか……いやいや、いいお嫁さんになれるよ」
なんか支離滅裂な言い方になってしまった。だが、知加子は少し気分を良くした様だ。

「ホント？ そう言ってもらえると嬉しいなあ。ささ、早く食べちゃお」

単純な奴でよかった。素直に喜ぶ知加子に俺はやっぱり変わって
いないのかな、と思いつつ彼女の手料理をいただく事にした……。

28、食後のまったり癒しタイム

「——ごちそうさまでした」

お前はいつの時代の人間だ、と自分につっこみたくなる様なセリフとともに手を合わせて箸を置く。

「どーいたしまして」

知加子は俺の態度に気を良くして笑顔で応じる。特に手の込んだ料理ではなかったが、なかなか美味しくいただきましたからこの反応は当然の事ですよ。

やっぱり朝食はシンプルでいいのだ。

海月の料理も負けず劣らず美味しいのだが、惜しむはこのシンプルさが無いところかな。美味しいが飽きが来るので今回は知加子に軍配が上がった。

……なんのこっちゃ？

茶化さず素直に料理の腕をほめられた事が余程嬉しかったのか、知加子のご機嫌よろしく鼻歌を歌いながら食器を洗っている。

以前はすぐに食器など洗ったりしなかったのに。そこら辺のころは成長している様だ。

俺は、そんな知加子に感心しつつ、床にゴロゴロ転がりまったりとくつろぐ。これ、サイコー。

もし、これで煙草が吸えるのなら……朝の至福を味わえたのに。しかし、残念な事に知加子の部屋には灰皿がない。

一応、喫煙者のたしなみ“携帯灰皿”を常備しているが、さすがに煙草を吸わない人の部屋で喫煙するほど俺は非常識ではない。それにヤニで壁やカーテンが汚れちゃうしね。

よって、ここにいる限り至福の一服はお預けになる。

ひたすらゴロゴロ転がってテレビを見ていると、片付けを終えた知加子が戻って来た。

「……ヒロ、何してるの？」

まったりしている俺を呆れ顔で見下ろす。

「見てわからんのか？ 転がってんだよ」

平然と返す俺。この極上のリラックスを体感できる“浜名式まったりストレッチ”を知らないとは……。

いや、知るわけないか。俺オリジナルだからな。

「あ、そ。じゃあ、しばらくそのまま転がっててね」

転がる俺に冷たい言葉を投げつけて部屋を出る知加子。

リアクションが冷たいとなんだか空しくなるなあ。一人でゴロゴロ転がっているのが急に切なくなってきた。

こっちは客なんだから、ちゃんと相手してくれよ。そんな訳のわからない理屈を心の中で呟き、ヒマを持て余す俺は知加子のところに行ってみる事にした。

どこにいるかな。何してるかな。ちょっと気になる身なる木……

…妙なテンションで知加子の元へ。

廊下に出るとドアの向こうから物音が聞こえる。

おそらく洗面所か何かだろう。食後だから歯磨きか？

何の疑問も無く俺はドアに手をかけると洗面所に飛び込んだ……。

29、扇情のバスルーム

忘れてた、シャワーの後のお、睦みあい（季語なし）

……目の前には下着姿の知加子がいる。しかもタイミング良くブラジャーを取ったところだった。

どうやらお風呂に入ろうとしていたらしい。

歯磨きでもしていると思った俺は、勢いよくドアを開けて飛び込んでしまった。その突然の行為に知加子は声をあげる。

「キャッ！」

とつさに胸を隠しキツと睨みつける。余程びっくりしたのか、髪を振り乱しては顔を真っ赤にすると烈火の如く怒り出した。

「ちよつと急に開けないでよ！ マジびっくりしたでしょ！」

うわ、ヤバイ。本気で怒ってる。

せつかく和やかに朝の一時を満喫していたのに、このままでは非常にまずい事になる。

「あ、悪い！ まさか風呂だと思わなかったんだ。本当にすまん！」

即座に謝罪する。雰囲気ぶち壊すよりよっぽとマシだ。

俺は知加子の肩を軽く叩いて再び頭を下げる。

「ごめん、俺が悪かったよ。機嫌直してくれよ、な？」

知加子はまだ頬を膨らませてはいるが、俺の誠意ある対応に表情をいくらか和らげる。それでも冷ややかな眼差しを向けてくる。

「——ヒロ、転がってるんじゃないの？」

痛いトコを突いてくるなあ。一人で転がってもつまらんだろう。言い返したい気持ちをグツと堪えて知加子の肩に手を置く。

「ホント、悪かったつて。いい加減機嫌直してくれよ、な？」

誠心誠意心を尽くして謝罪し、露わになった肩を揉みはじめる。

「いやあゝ、疲れてますなあゝ」

何気に凝っていたので両肩をほぐしはじめた。知加子は少しくすぐったそうに身を振る。

「ヒロ、手つきがちょっとやさしいよ。違うところ触っちゃダメだからね？」

その言葉とは裏腹に口調はさつきよりもだいぶ柔らかくなった。

「りょーかい、りょーかい」

いくらか機嫌が良くなったのを実感すると俺は内心安堵した。

せっかくいい感じでここまで来たのに、ここで喧嘩別れした日には旅の主旨に反するというもの。わざわざ休みまで取って来たんだから、いい思い出作らないと。

その思いがあつたのでこの件については深く反省した――。

……しばらく肩を揉んでいると知加子の機嫌はすっかり直った様だ。初めのうちは体を固くしていたが、今ではリラックスして身を委ねている。

「なかなか上手いじゃない。どうせなら、もつとしてほしいな」
マッサージ作戦、成功！

いつも疲れ切つて帰つて来る海月相手にマッサージをしていた俺は、実はこれも密かな特技となっている。それがこんなところで役に立つとは、日頃の行いの良さつてやつだろうか？

雰囲気が良くなったのでこのままマッサージ作戦を続行する事に。

「おおっ。んじゃ、全身くまなくマッサージしてあげよう」

そう言つて俺は両手を肩から背中へ持つて行き、親指でツボを刺激する。

強すぎず、弱すぎず。

微妙なタッチで優しく、かつ効果的にしっかりと圧す。

なかなかやりがいのある体してんなあ。こりゃ、ステータス『マ

ッサージ。』の習得の日も近いな。

そんな事を思いつつ、丹念に知加子の背中を圧しまくる。

「……はあ……ヒロ、ホント上手だね……」

腕組みする様にして胸を隠しながら細く呟く。

だいぶほぐれてきたので背中から腰に指をなぞらせる。その瞬間、知加子の体がビクツと震えた。

「……指使いがエッチだなあ……ちよつとお、その気にさせるつもり？」

少し赤らめた顔で振り向く。その目が若干潤んでいる。下着姿でそんな目で見られたら……ちよつと情欲が煽られてしまう。

そう意識してしまうと腰を圧す指の動きが自然にエロティックなモノへと変わっていく。

「——ちよ、ちよつと待つて！これ以上はやばいよ……ホントにしたくなつちゃうからストップ！」

その気になりそうな空気を察した知加子は振り向いて俺のマッサ―ジから逃れた。

顔はもう真っ赤になっており、わずかに涙が浮かんでいる。

おいおい、その格好でその表情はないだろう。

かなりヤバイ。俺のエロ心を大いに増大させてくれる。

この状況で一度火がついた情欲を鎮められるだろうか？

……できるわけがない！

目の前に立つ下着姿の知加子は、俺の心を雄弁に代弁している直立不動のピラミッドにその潤んだ瞳を向けている。

驚きと羞恥、それと期待の込められた眼差し……そう思うのは俺の気のせいだろうか。いや、どちらかというと好色な部類に属する彼女は、きつとその後の展開に密かな期待を寄せているはず。

これ以上ない意思表示を示しているのだ。もはや、どうにも止まらない。

30、成り行きまかせのバスタイム

——朝食を終え暇を持て余した俺は、自身の癒しとささやかな話題のタネとなるつつこみ所満載の“浜名式まつたりストレッチ”を敢行する。だが、その体を張ったギャグも場を読まない知加子のしらけた眼差しにより、場を沈めたあげくに自身の癒しも台無しにされる。

“極上のリラックスを体感できる”と近所でも評判……にはなっていないが、食後の話題を潰された上に知加子はリビングから出て行く。

その後を追った俺は、お風呂に入ろうと服を脱ぎ下着姿になった知加子と遭遇してしまう――。

今、俺の心のパーセンテージは『このままベッドタイムに突入したい気持ちが一割、ソフトプレイでこの場をやり過ごそうと思う気持ちが一割強、我慢・忍耐・自制の気持ちが一割以下』となっている……そう、俺のやる気ゲージはマックスなのだ。

もちろん、この状況下では“愛しの彼女・海月”の事など頭がない。目の前の美味しい果実を貪りたい思いで頭はいっぱいだった。

その空気を察した知加子は身構える素振りを見せるも、その表情や漂う雰囲気により説得力は皆無。

「……チカ、風呂ですか？ それともベッドでしょうか？」
遠回しに言ってもバレバレなので、俺はストレートに誘う。

「え？」

まさか答えを求められるとは思わなかったのだろう。知加子はその問いに一瞬答えを詰まらせる。

とりあえず邪魔な服は脱いでしまいたい。俺は知加子がまだ答えに迷っているにも関わらず、シャツとズボンを脱ぎ出した。

その行動を固唾を飲んで見ている。

俺のやる気ゲージが臨界点に達している事は十分に理解できただろう。その表情は戸惑いの色に染まり、少なからず動揺している。

攻めるのは強いが、逆に攻められると一転して脆さを露呈する…

…そんな彼女の性格が俺の燃え盛る情欲の炎に油を注ぐ。

——昨夜の情事をほとんど覚えてなく、朝の記憶しかない俺。正直なところ、知らないうちに“行為に及んだ”という事に齒がゆさを感じていた。

記憶は無いのに事実だけが残っている。その様な曖昧な現実を受け入れられるほど、俺は素直ではない。

どっちにしても後で罪悪感に苛まされてしまうなら、しっかりとその肌を記憶に焼き付けておきたい……そんな開き直りにも似た思いが心を支配していた――。

後には引けない状況。互いに気分はそっちへ向いている。

「……シャワーでも浴びるか」

それでも態度を明らかにしない知加子に業を煮やした俺は知加子の手を取る。とっさに胸を隠そうとするが体を引っ張られたので丸見えだ。

そのまま浴室のドアを開くと中に入る。

「チカも全部脱いでしまえよ」

俺はそう言っぴらミッド状態のまま維持し続ける下着を脱ぎ、開いたままのドアの向こう側へとそれを放り投げた。

俺の積極的かつ直接的な誘いに戸惑っていた知加子だったが、俺の本気モードを見て取ると本来の状態に戻った。

有無を言わさぬボディサインに彼女は静かに頷く。

「……ヒ口、恥ずかしいから……あっち見て」

「ああ」

俺は即答すると素早く後ろを向く。そして、目を閉じて深呼吸をして高揚してゆく心を抑える。だが、気持ちとともに体も熱くなっている——。

31、心と体に刻む記憶

……時計を見れば、もう昼になっていた。

心地よい気だるさと脱力に身を委ねつつ、微睡みの中を漂う知加子に目を向ける。彼女はその視線に気付き、首を少しだけ動かすと夢心地の表情で時計の針に目をやる。

「……もう、お昼だね……」

力無い呟きが、俺の耳にこびりつく。残り時間が少なくなっている現実を感じたからだ。

——不意に、散々味わい尽くしたはずの柔肌が恋しくなる。

情事の後に欲しくなるのは珍しい。それだけ良かったのか、いつもとは違った感覚が俺の本能的な部分を大いに刺激してくれた。

力無い体を抱き寄せて、まだ熱を帯びている肌の感触に酔いしれる。足りないわけじゃないのに、何故かこうして重なり合っていた気分。

別れが近いからか、少しでもその感触を記憶に刻み込んでおきたいのだろう。

——俺はその思いに素直に従う。

余韻を引きずり、脱力し切った知加子を抱きかかえる。心地よい重みとともに熱い肌を感じる。彼女の腰に手を回し、絡む足を開かせて深いトコまで感じようと体を密着させた。

「——ああっ！」

その瞬間、知加子は短い声を上げると力無くしがみつく。その強い刺激に耐えようとするが、何度ものぼりつめていた体はいまだに感度が高く、繋がったまま動きを止めているのにも関わらず激しく体を震わせては潤んだ瞳から涙を溢れさせる。

動くとすぐに果ててしまいそんな反応。荒い息については必死に耐える姿に愛おしさを感じた。

腰に当てた手を這わせる様にしてすべり上らせ、髪を優しく撫でながら唇を合わせる。

「——んっ……んんっ……」

それだけでも充分に満たされた。彼女の一番敏感な部分に激しい反応が起き、その熱と強さに思わず俺まで果てそうになる。

それをグツと堪えて彼女の熱い体を強く抱き締める。こぼれる涙が俺の頬をつたう。

「……チカ！ うっ、ヤバイ……」

唇を放し、声を上げる。呼吸を整えて必死に耐えながら熱い体を包み込む。

身動きは取れそうにない。少なくとも腰から下は動かせない。それほど強い刺激がお互いを襲っていた。

「……あぁっ、あぁ……」

喘ぎすらも出せないほど快感に飲み込まれていた。体の力が入らないのか、自分からは動く事もできないでいる。

わずかに顔を上げて、目で訴えるのが精一杯。

この快楽に溺れたい、と言いたげなその瞳に……俺は無言で応えた。

「——結局、昨夜からやりっぱなしだったな……」

着替えをすませた俺はベッドの縁に腰を下ろしながら、シーツにくるまる知加子に声を掛けた。

時計の針を見れば、そろそろ部屋を出なければならぬ。だが、このまま彼女と別れるのはいただけない。男として最低だ。

俺は携帯電話を取り出すと友人に少し遅れる旨を伝えた。

「……もう少しここにいるよ。だから寝てもいいぞ。起きるまでいるから」

耳元で囁く様に言つて髪をいじる。

優しく、慈しむ様に。

普段の姿とは違つた彼女に、わずかな刺激だけでも壊れそうな、そんな印象を覚える。

目を閉じて気持ち良さそうに身を任せる知加子。なんともいじらしいその姿に別れる事を躊躇させるものを俺は強く感じた。

32、心に戒めを

どれくらい経っただろう。いつの間にか俺も眠っていた。ベッドに目をやるとそこに知加子の姿はない。

シャワーでも浴びてるのか。

俺は眠い目を擦りながら浴室へと向かった。

——ドアを勢いよく開く。

開けてから朝と同じ事をした、と思ったのも束の間、ちょうど着替え始めるところに遭遇してしまう。

朝と違うのは、その反応だった。

「ヒロ〜、もしかしてさあ〜、狙って入って来てる？」

俺の視線にお構いなく着替え続ける知加子。

所々に魅せる様な仕草をしては俺の心を惑わせる。

「駅まで見送りするね。ついでに夕食の買い出しもしなくちゃ…」

…」

淡々とした口調で着替える。俺は何も言えずにそれを見る。

（やけにあっさりしてるな）

先ほどまでとはまるで違った冷めた態度。

もう用は済んだ、と言わんばかりの雰囲気を感じ、俺は少し苛立ちを覚えた。

「——なんだよ、チ力。ずいぶん冷めてるじゃないか。さっきまであんなに燃えてたのによ」

少しトゲのある皮肉を浴びせる。

これではただ利用されている様な気がしてならない。

俺の言葉に知加子は悪戯な笑みを浮かべ、俺に歩み寄ると唇を合わせてきた。

「……んっ？」

突然のキスに驚いた俺は思わず一步下がり知加子の顔を見る。

「あら？ どうしたの？ ヒロ、もっとラブラブしたいんじゃないの？」

しれっとした口調で口に手を当てて微笑む。

「でもさ、私が本気になったら困っちゃうんじゃない？ だから割り切った方が利口よ」

知加子はそう言う俺の肩をポンッと軽く叩き浴室から出て行った。

残された俺は唇の感触がまだ残る口元に手を当てて立ち尽くす。

（……言われてみれば、そうだよ……）

自分のしている事はただの浮気。互いの欲を満たすだけの戯れ事に過ぎない。

知加子の言葉に俺は欲に溺れていた事を自覚し、危うく知加子まで巻き込んでしまう事に寒気を覚えた。

「ヒロ、そろそろ行こっか」

髪を乾かして化粧も済ませた知加子は、安らぎの一服が出来ずに寝転がっている俺に声を掛けてきた。

もう夕方になっている。

いつまでもここに居るわけにもいかない。パターンのまた肉欲に溺れるのが目に見えている。

これ以上肌を重ねたら、いくら何でもハマってしまう。二人の体の相性はそれほど抜群によかったから。

互いに“それ”がわかっているから、今まで努めて割り切った態度で接してきたのだ。

付き合ったら堕ちる。

この確信的な不安が二人をこんな関係にした事を改めて思い知る。

「オッケー」

知加子の呼びかけに答えると立ち上がり、バッグを持ち玄関まで無言で歩く。

「……急がない急がない。ゆっくり行きましようよ。お別れなんだから」

そう言って俺の背中を小突く。

振り向くと笑顔の中にわずかな陰りが見て取れる。

寂しくないわけないでしょ。

そんな想いが伝わってきて胸がグツときた。

「ああ、ゆっくり行こうか」

俺は笑顔を崩さない知加子に心の中で感謝すると靴を履いてドアを開ける。

「お邪魔しました」

「……どうしたの？」

俺の言葉に首を傾げる知加子。

彼女に俺の寂しさは伝わっていない様だ。

だが、それでいい。未練を残しては離れられなくなる。

あくまでも割り切った関係でないと互いをダメにしてしまう。

気の合う仲間でたまに肌を重ねるぐらいの軽い関係が一番なのだ。

「なんでもないよ。さ、行こう」

「うん」

知加子は鍵をかけて俺の隣へ来る。そして、ゆっくりと歩き出す。まもなくお別れ。だが、旅に別れはつきもの。

俺はそう心の中で呟くとポケットから携帯電話を取り出し、これから会う学友にメールを打ちはじめた……。

33、揺れが止まった心の天秤

ふと隣を見れば、知加子にはこやかな笑みを浮かべながら歩いていた。その足取りは軽い。

特に言葉を交わすわけでもなく、駅に向かう二人。

片や、夕飯の買い出しのため。

片や、次なる再会のために。

駅で二人は別れる。日程の短い旅において時間というのは限られたもの。

だから、別れを惜しんではいけない。俺と知加子の場合は尚更だろう。

いくら割り切ればいいとはいえ、海月の事を想えば一連の戯れ事はただの裏切り行為にしかない。冷静に考えてみると、やつぱり後ろめたさに苛まされる。

「……ヒロ、何考えてるの？」

手を引っ張って自分の方に向かせる知加子。もう、その表情に陰りはない。

完全に割り切って気持ちを切り替えたのか、それとも俺に気を使っているのか。見た目では判断のしようがない。

「あ、彼女の事？　もしかして、自分を責めちゃってるわけ？」

大丈夫よ、ヒロが言わなきゃバレる事なんてないんだからさ、あまり深く考えない方がいいわよ」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら俺の心を読んできてる。

「でも、ヒロ変わったね？　前はすぐに割り切れたのに、それだけ今の彼女が大事ってわけ？」

そう言って知加子は俺のわき腹を肘で軽く小突く。

……どうなんだろう。

確かに海月の事は大切に想っている。だが、それだけではない。

何故、俺は知加子との別れをこんなに惜しんでいるのか。もしかしたら、知加子に対しても後ろめたさを感じているのか。

きつと、そうなんだろう。俺達はいつも軽い付き合いに終始してきた。そこに本当の愛や友情があったのだろうか。

おそらく、そんな事を無意識のうちに考えていたのかもしれない。
「……それも、ある。でもさあ、なんかチ力に悪い気もしてるんだ」

「え？　なんで？」

知加子は俺の言葉に不思議そうに首を傾げる。

「だってさ、いつも会えばセックスばかりしてるだろ？　だからさあ、なんだかそれだけの関係の様に思えてならなくて……」

知加子は腕を組んで俺の言葉を反芻する。言いたい事がちゃんと伝わっているか、その仕草からは微妙な空気が漂う。

「そうかなあ？　私は別にそうは思わないけど。たしかにエッチばかりしてる気もするけど、ちゃんとした友人関係だと思うよ」

うんうん、と納得した様に何度も頷きながら言葉を繋げる。

「ほら、いつも会う時間短いでしょ？　だから、言葉だけじゃ足りない部分も出てくるじゃない。

そういう部分をさあ、肌を重ねる事で補ってるって感じかなあ。一番深いところでお互いを知るっていうの？　それに私は気持ち良くなりただけでヒロに抱かれてるわけじゃないし、ヒロだって体が目的で会いに来てるわけじゃないでしょ？　ちゃんと遊んだり喋ったりもしてるし……まあ、普通の友人関係よりは親密ってコトだよ」

知加子は俺の肩を軽く叩き、微笑んでみせる。

それでもまだ複雑な気持ちを完全に拭いきれない。だが、その言葉に俺の心は少し軽くなった気がした。

「……そうだな。ちよつと親密すぎるかもしれないが、たしかに“それ”だけの関係じゃないよな」

俺は自分に言い聞かせる様に呟くと気持ちを切り替えようと首を振った。

こんな気分で別れたら後味が悪すぎる。それに最後まで知加子に
気を使わせていたら、せつかくの再会も良い思い出にならない。

俺は下がり気味のテンションを無理矢理軌道修正すると、知加子
の肩を抱いて引き寄せた。

「え？」

突然の行動に驚く知加子。俺はそんな彼女に笑顔を向け、ピツタ
リと寄り添う様にして歩く。

「時間ないからな。少しでもチ力を感じておこうつて思っ

俺はそれだけ言々と視界に入って来た駅に目を細めた。

34、駅前木のベンチ

取り留めのない話題。いたって普通のトークを楽しみつつ歩く二人。

再会の時は短い。だが、別離の時を迎える割には哀愁を感じない。次の再会などアテにならないのに……。

駅前に到着した俺達は、飾り気のない小さな花壇の正面にポツリと佇む木のベンチに腰掛けた。

駅から横に逸れれば商店街。あまり賑わいを見せてはいないが、何気に品揃いは良いという。

これから俺は、次なる再会のため小一時間かけてバスの旅をする。しかし、閑静な街であるこの駅は地方並の交通量しかないので、これまた小一時間待たなければならなかった。

まあ、幸いにしてこのベンチには灰皿が設置されている。喫煙所の役割も担っているのだ。

そのおかげで禁断症状に悩まされる心配はない。さすがに知加子の部屋にお邪魔してから禁煙状態が続いていたので、これは大変有り難かった。

ベンチに腰掛けた俺は、さっそく煙草に火をつける。

紫煙を少しずつ肺に入れて、ゆっくりと吐き出す。

(……ああ、至福だあ……)

何時間ぶりの喫煙だろう。体に染み渡るニコチンが頭をスッキリさせてくれる。

至福の一服を嗜む俺の隣で知加子は目を細くしてその様子を眺める。

俺はいつもの様に紫煙くゆらせ至福に浸る。そんな俺がおかしい

のか、知加子は小さく笑う。

「チ力、どうした？」

その反応がいまいち理解できなかった俺は、吸いかけの煙草を灰皿に置いて聞いてみる。

「……うふふ。なんだかさあ、変わらないなあ、って思ったの。ヒロっていつも美味しそうに煙草吸ってるなあ、って……」

知加子はそう言うと言身を寄せて腕を絡めてきた。

「あの頃はさあ、公園のベンチでこうしてのんびりと景色を眺めてたなあ、って……ちよつと思ひ出しちゃった」

腕に絡めた手に力が入る。

返す言葉が見つからない。俺は目の前の花壇に目をやり、その風景を心に刻んだ。

これもまた、ひとつの思い出にしよう。

肌を重ねるよりも、今のこの時間の方が俺にとって大事なモノの様に思えたから。もしかしたら、知加子も同じ事を思っているかもしれない。

「……チ力、そう言えば俺達ってさ、いつも公園とかのベンチでまつたりしてたよな？　今みたいに……」

なんだか切なくも懐かしい気分。一緒にいるだけで楽しかった日々が鮮明に頭の中に浮かんでくる。

おそらく知加子も思ひ出しているだろう。だから、二人の間に言葉はいらないと思う。

俺は灰皿に置いた煙草をくわえると煙を肺に入れ、この短い再会に思ひを馳せた。

……辺りは薄暗くなり、商店街の店先に明かりが灯っていく。寂れた街だけあって、あまり派手なネオンなど無く煩わしさを感じさせない。

冬の夕暮れは冷える。それにバスもそろそろ来る頃だ。

このまま離れたくない気持ちは強いが、いつまでも一緒にいるわ

けにもいかない。

何本目の煙草をもみ消すと俺は、バッグを手に立ち上がった。

「……そろそろ時間だから、俺行くわ」

素っ気ないセリフに胸が少し痛む。

気の利いたセリフのひとつでも吐ければ格好もつくのだろうが、あいにく俺は『セリフ×』なのでうまい言葉が浮かばなかった。

「うん、わかった。私も買い物しなくちゃいけないから……ここでお別れだね」

その目は、少しだけ寂しさを滲ませていた。だが、表情はにこやかで後腐れなく送り出そうという想いで満ちている。

俺の不器用さを理解し、未練を残さない様に調子を合わせてくれているのだ。

俺はその気遣いに胸が詰まりそうになる。

「……ねえ、ひとつだけお願いがあるんだけどさあ、聞いてくれる？」

いつもの明るい口調で知加子は俺の横に並んで来た。

「ああ、なんでも言ってくれ」

この状況で断れるはずもないし、また断る気もない。俺は即答すると知加子の方に顔を向け、次の言葉を待った。

知加子は満足した様に頷くと手招きしてきた。

「ん？」

意味がよくわからなかったが、知加子の手招き通りに近寄る俺。

知加子は不意に辺りを見渡すと俺に軽く微笑み、おもむろに首に手をまわすと唇を合わせてきた。

「——んっ！？」

突然のキス。まわした腕は力強く、俺は抱きしめられたまま動けなかった。

触れるだけの長いキス。

俺はそのキスの意味をなんとなく悟り、その想いに応えようと知加子をきつく抱きしめると最後の感触に酔いしれた……。

35、待ちぼうけ

……唇を離れた後、知加子は俺の額に指を当てて軽く押す。それにより抱き締めた腕が離れ、知加子は俺の腕をすり抜ける。

「——ん？」

もう少し余韻に浸りたかった俺は、両手を宙に浮かせたまま思わず声を漏らす。

「ヒロ、バス来たよ」

知加子はそう言って抱き締めた時に落とした俺のバッグを取って道路の方を指さす。

その方向に目を向ければバスがちょうど停留所に着こうかというところだった。

「——ヒロ、これでお別れね。また連絡するから、時間があつたらまた会いましょうね……バイバイ——」

知加子は少し早口気味にそう言う満面の笑顔で手を振った。

バスの扉が開く音を背にした俺は時間が無くなった事を知り、それならその笑顔に応えようとガッツポーズを決めてみる。

「……ああ、またな！」

ただの強がり。今更ながらに寂しさがこみ上げてきた俺は精一杯の笑顔に向けた……はずである。

他の乗客が全員乗ったのを確認すると俺は最後に乗り込んだ。幸いにして座席は空いていたので先頭の席に座ると窓から知加子に手を振る。

俺が席に座ると同時にドアは閉まり、バスはゆっくりと走り出した。

駅の方に目を向けると、知加子は笑顔のまま手を振っているのが見える。俺は、見えなくなるまでそれを静かに見つめた——。

旅に別れはつきもの。

だから、いちいち悲しんでなんかいられない。しかし、今回の別れに俺は何故か胸を締め付けられるものを感じていた。

いつもと違う“何か”が俺の心にあるのか。

俺はその答えを出そうと考えを巡らす。だが、流れる景色に意識が向くと、いつの間にか次の再会に思いを馳せていた……。

バスに揺られる事数十分。東京の隅に位置する閑静な街に到着した。

過去、何度も訪れた東京で唯一土地勘の利く街。

閑静とはいふものの、街の開発具合は地方の繁華街に引けを取らない。交通の便も良く人通りも多い。電車で数分も揺られれば違う県になる事から、県外の人達も多数訪れているだろう。

まあ、それでも都心の混雑に比べれば“閑静”と言わざるを得ないが。

バスを降りた俺はポケットから携帯電話を取り出す。そして、次なる再会を果たすべく友人に到着したぞメールを打ち込んだ。

素早く文章を打ち込み送信。後は返事が来るのを待つて会うだけである。

ちなみに友人の住む場所はだいたい覚えているので直接行ってもよかった。しかし、それでは感動の再会にならない。それに会ってもすぐ夕食という名の飲み会に出発するのが二人の王道パターンだったので俺は駅前で待つ事にしたのである。

駅前の木のベンチに腰掛け煙草に火をつける。ちょうど帰宅ラッシュの時間帯だったので、行き交う人達の群れが駅前の景観を損ねる事甚だしい。

間違ってもこの人の流れに逆行して行く事は無理だろう。そんな

下らない想像をしながら俺はニコチンを摂取する。

……体が冷えてきた。

雪こそ降っていないが、染み込む様な冷気が体から熱を奪う。それなりの防寒装備に身を包んではいるが、冬の夕暮れはバッドステータス『寒さ×』を持つ身にはやはり堪える。

ホットコーヒーでも口にしていないと身が持たない。俺は辺りを見渡し自販機を探す。

ブルブルッ、ブルブルッ……。

ホットコーヒーを求めさまよい出した俺の胸が震える。

「——おっ、やっと来たな」

ブルブルッ、ブルブルッ。

携帯電話のバイブが小気味良いバイブレーションを奏でる。

俺はさっそく返信内容を見ようとメール画面に切り替え、立ち止まってその内容を読んだ。

『すまん、寝てた。今から準備するので悪いがもう少し待っててくれ。駅に着いたらまた連絡する！』

……マジかよ。

俺は携帯電話をポケットにしまおうと思わずガックリうなだれてしまった。

だが、それも仕方の無い事だ。もとはといえば、俺が知加子の部屋に長居し過ぎたのが原因だし、それ故に待ち疲れて寝てしまうのも無理はないだろう。

「……参ったね、こりゃ……」

あと何分待てばいいのかわからないが、とりあえず早急に暖を取る必要がある事は間違いない。

自業自得とはまさにこの事だ。

俺は寒さに身を震わせながらも気を取り直して自販機に向かう事

にした。

36、冬空に我思う旅の心

いくら雪が降っていないとはいえ、冬の夜はかなり冷える。自販機で缶コーヒーを購入し体の中から暖めようとしても、一度下がった体温はそう簡単に戻るものではなかった。

駅前のベンチに腰掛けて流れゆく人波を見ても気分はさっぱり紛れない。

寒い。ひたすら寒い。

ただそれだけが俺の頭にあって、時間の流れが限りなく遅く感じる始末だった。

チビチビと缶コーヒーを飲み、寒さを紛らわそうと足掻く。だが、そんな俺の試みをあざ笑うかのように時間が経つにつれ、ホットコーヒーがアイスコーヒーへと化していく。

持つ手が冷たくなるんですけど。

飲み干す前にアイスコーヒーになる事は間違いない。俺は無駄な足掻きを止め、缶コーヒーをベンチの空いてるスペースに置くとニコチンで凌ごうと煙草を取り出した。

火をつけて煙を吸い込む。先端の熱で少しだけ顔に暖かさを感じる。

俺は煙草を吸いながら今回の旅について考える事にした……。

——今回の旅も、いよいよ後半戦だ。

我が城へ戻れば、年末年始の大売り出しで忙殺される事は確定する。無論、休日返上で正月明けまで早出残業の嵐となるわけで……そう、精神的にも肉体的にも過酷な日々が俺を待ち受けているのだ。故に年末年始は遊びに行く事も……いや、疲れてて遊びに行く気力もないので今のうちに気分をリフレッシュさせるためにここへやって来た。

その発端は知加子からの電話だったが、どっちにしても東京に来る事になっただろう。

それにしても知加子は変わったのか変わってないのか、最後までよくわからなかった。

まあ、厳密に言えば変わっている。

見た目も綺麗になったが、社会人になったからか醸し出す雰囲気
が大人びていた。

そう、大人の女になったのだ。

ただ、内面は俺の知っているあの頃とほとんど変わっていない。

それが俺の前だからかどうかは別にしても、再会した知加子は俺
の知っている知加子のままだった。

変わらぬものがそこにある。

俺は、それが無性に嬉しかった。都会に染まらずにいてくれた事
に俺は何故か安心していた。

いつまでも変わらぬ友情を感じられるからか？

その辺のところはよくわからない。だけど、とにかく会ってよか
ったと心から思えた事に俺は喜びを感じている。

それで十分だ。

いろいろあって海月には詳しく話せなくなったけど、今のところ
俺は後悔していない。

次なる再会の主は俺の親友だ。今度は後ろめたい気持ちになる事
無く羽目を外せる。

取り立てて特別な事があったわけじゃないが、俺とそいつはとに
かく気が合う。

まったり屋の俺を引っ張ってくれるし、何より一緒にいるだけで
飽きさせない“空気”を持っている。

そんな彼だからこそ、俺はバッドステータス『寒さ×』を持って

いても頑なに外で待てるのだ。

……でも、早く来てほしいな。風邪ひかない程度に来てくれると助かるのだが。

そんな事を思いながら俺は冷たくなった缶コーヒーを飲み干して再び煙草に火をつける。

夜はまだ長い。あと少しだけ我慢すればいい。

俺は気を取り直してマンウォッチングに興じる事にした……。

37、待ち人現る！

冬の夕暮れは暗い。もう夜といっていいくらいだ。

寒さのせいかな、時間の経つのが遅く感じる。

駅前の木のベンチで流される人の波を眺めつつ次なる再会の主を待つ俺。携帯電話のサブ画面に目をやり五分と経たない現実にゲンナリする。

たった数分でも、やたらと長く感じる。寒さを凌ぎつつ待ち続けるこの状況なら尚更だった。

時は金なり。

昔の人は偉い。まったくもってその通りだと俺はしみじみ思った。

……俺は待つのは嫌いじゃない。どちらかと言えば人を待たせるよりも待つてた方がいいタイプだ。

しかし、それも時と場合による。

特にバッドステータス『寒さ×』を持つ俺にとって、寒い中待たされるのはかなり身に堪える。

そう、つまるところ“待つ”というよりも寒さに参ってしまいそうになっていたわけだ。

流れる人波を眺めても気分は紛れず、ただひたすら耐える。心頭滅却すれば氷もまた暑し……ってわけにはいかないのが現実だった。

「——よっ」

後ろから掛け声とともに俺の肩を叩く手。振り返ってみると、そこには懐かしい顔があった。

「おおっ、久しぶりだなあ！」

やっと現れた友人の顔に俺は寒さを忘れて立ち上がる。

待ちわびた再会、それにこの寒さからの解放、様々な要因により

俺は軽い興奮を覚え元気を取り戻す。

「感動の再会に浸りたいが、ちよつと寒いな。とりあえずどっか暖かいトコに行くか。」

そう言つて手で酒を飲む動作をしながら俺の肩を叩く。

「もちろん！ それにしてもちつとも変わらんなあ、緒方は」

約一年ぶりの再会となる友人―緒方―は特に変わったところがない。まあ、時間も経っていないから当たり前の事かもしれない。だが、知加子と比べるとその変化の無さが何故か心地よく感じられた。

「たつた一年しか経ってないんだ、それは大樹も同じだろうが。何アホな事抜かしてんだ？」

緒方は笑いながら歩き出す。

たしかにそうだな。俺は緒方の言葉に頷くとその後を黙ってついて行く。

都会の地理には疎いし、ここは緒方のホームグラウンドだ。余計な口出しなどせず案内されよう。

「――そう言えば、昨日まで女と一緒にだったんだろ？ しつかり楽しんできたか？」

颯爽と歩きながら緒方は振り返りもせず痛いところを突いてくる。

「まあ、こっちに来るのが遅れるくらいだ。俺は察してるぞ」

そう言つてニヤリといやらしい笑みを浮かべ、再び前を向き歩を進める。

その通りなので何も言い返せない。

緒方は知加子の事を知らない。ただ“女友達と会う”としか言っていないが、どうやら訳有りである事に気づいた様だ。

「おいおい……」

一応、軽いつつこみだけを入れる。この場合あまり意味を為さない。

「案ずる事はない。誰にも言わん。浮気は男の甲斐性だ。」

短く言い切り歩を速める緒方。俺もそれに続く。寒いせいか、ちよつとした小走りで繁華街に足を踏み入れる。

——向かう先は飲み屋だ。

きらびやかなネオンの輝きが二人の再会を祝福してくれている様に見える。

「——大樹、今夜はいろいろ聞かせてもらおうか。昨日までの話も含めて、な」

居酒屋風のチェーン店の前で緒方は立ち止まるとそう言って店の中へ軽快な足取りで入って行く。

さて、どうしたら良いものか。緒方の言葉に少し戸惑いを覚えるも俺は続いて中に入った……。

38、乾杯！

——店内は薄暗かった。その暗さがどことなく涼しげな印象を与える。しかも時間帯も早いせいにか、いかにも常連といった客しくない。それが余計に寒気を感じさせてならなかった。

そんな俺を知る由もない緒方はまっすぐカウンターの隅の席へ向かう。

Ｌ字型のカウンターの隅にある席に座ると慣れた感じで壁に背を付けて俺を手招いた。

ああ、いつもの席ってやつか。

どうやらそこが緒方の指定席らしい。俺はひとり納得するとその隣の席に腰掛け、バッグを足下に置いて軽く息を吐く。

「——いやあ、いろんな意味でしんどかったわ」

ポケットから煙草とライターを取り出して灰皿を手前に引き寄せる。そして箱から煙草を一本抜き取り口にくわえ火を点け、ゆっくりと肺に流し込んだ。

……暖かい場所で吸う一服は格別だ。

実際は暖かろうが寒かろうが味はたいして変わらない。だが、この一服は何故か美味しく感じられる。

「さて、まずは軽く一杯やって体を暖めるか——おっちゃん、中生ジョッキで。大樹はチューハイでいいか？ メニュー渡しておくから食いもんも何か頼んでくれよ」

緒方はカウンターの奥にいる中年の店員に自分の注文を頼み俺にメニューを渡す。

渡されたメニューに目を通すと完璧に居酒屋メニュー。だが、全面力ラーのそれには料理の写真が旨そうに載せてあって心惹くものを少し感じたりする。

注文を選んでいる間にお通しの小鉢を並べる店員。そして、おし

ぼりで手を拭いてから煙草に火を点ける緒方。その様子がやけに馴染んだ風に見える。

……どれも旨そうだなあ。

メニューはどれも居酒屋にならどこにでもある様な食べ物ばかりなのだが、何故か旨そうに見えて仕方が無い。

「あ、俺はレモンチューハイの中ジョッキで。あとは……枝豆とポテトをもらおうかな」

目移りしてしょうがなかったので、とりあえずつまみの定番を頼み至福の一品を堪能する事に。

「俺は鶏の唐揚げとニラレバ」

メニューを見ずに緒方は間髪入れずに注文する。店員も緒方の注文はわかりきっている様でササッと注文を書き込む。

こいつ、いつも食ってんな。緒方もこの店の常連客なのだろう。やけに馴染んで見えるのも頷けた。

店員は注文の復唱をするとその場を離れる。

二人の場所だけ紫煙が煙る。ライトに照らされたそれは煙幕の様に辺りを漂う。

これではまず嫌煙者は近寄らない。というか、店内は圧倒的に空席の方が多いのだから気にする必要など無い。

それでも久しぶりに会うのだ、積もる話もあるわけで周りに部外者がいると羽目を外せないいで人がいない事に越した事はなかった。

「……さてさて、大樹君。聞かないでおこうかと思ったが敢えて聞こうと思う。何故会うのが遅くなったんだ？」

にこやかな笑みを浮かべながら目を光らせて緒方にはじり寄って来た。

その目は興味津々、答えは知っているが本人の口から聞きたいという意志がありありと見て取れる。

「まあ、なんだ。大人の付き合いなんで似たり寄ったりだよな」
妙に意味深な言い回しで逃げ道を塞いでくる。

なんだか尋問みたいだな。俺はさも楽しそうに問いかけてくる緒方にふと学生時代を思い出す。

あの頃も、何かあると同じ様な態度で話が始まったんだよね。どんなに深刻な悩みでも、おちゃらけた感じで話を進めるから途中で気分が沈んだりせず最後まで話して心に溜まったモヤモヤを払拭してくれたっけ。

ふざけた様で真剣に答えてくれた記憶が心の中で鮮明に甦る。

あの頃と変わってないな。そう思うと俺は苦笑いしてしまった。

酒の席だ、言ってしまうおう。

半ば開き直りの心境だったが、俺は包み隠さず話そうと残り少ない煙草を揉み消して緒方の方を向いた。

「……いろいろあったんだけどさ、簡単にいうと成り行きで浮気したんだわ……」

若干の抵抗を感じたものの、思いの外スパツと言えた。

緒方は小さく頷くと煙をゆっくり吐いて煙草の灰を灰皿にポンポンと捨てて。そして、相変わらずのニヤケ顔で口を開いた。

「ふむふむ、浮気か……男と女が会えば、そんなシチュエーションにもなるわな。まあ、どうしてそうなったのか詳しくわからんが……もし俺がその状況に置かれたら間違い無くお前と同じ事をしてたと思うよ」

そう言つて煙草を口にくわえると緒方は俺の肩に手を乗せて何度も頷いた。

無責任の様でいて妙に納得のいく回答だった。

その答えに共感の言葉があつたからか、下手な慰めや説教より余程胸に響いてくる。

「……んで、あれか？ 浮気した事に後ろめたさを感じてるってやつか。まったく、過ぎた事を気にしても後戻りなんてできないんだからスッパリと割り切つてしまえよ！」

緒方は乗せた手で俺の肩を叩く。

顔はニヤケているが目は真剣そのもの。言葉はあまり良くないが、

その裏側にある真意を俺は有り難く頂戴する。

俺はその言葉を噛みしめる様に心の中で反芻し、気持ちの整理をしようと煙草を口にした。

…… 会話が途切れ、二人の周りを静寂が支配する。話の内容が内容なだけに言葉を繋ぎ続けるには無理がある。

だが少し間ができたその時、実は狙ってましたとばかりにタイミング良く店員が注文の酒を持って来た。

それにより静寂の時は終わる。酒を手にした俺達は、どちらともなくグラスを片手に乾杯の音頭を取ったからだ。

「再会を祝して乾杯！」

俺はグラスを合わせると酒を一気に流し込んだ。

体に染み込むアルコールが気分を高揚させてくれる。店内の暖房のせい、いつもより染みていくのが強く感じられ、なおかつ程良く冷えたアルコールが疲れた体に活力を与えてくれる様な気がした。

「——くううつ、生き返るなあ。おっちゃん、同じの追加頼むわ！」

緒方も一気に飲み干し追加の酒を注文した。そこに間髪入れずに俺も声を張り上げて追加注文する。

「俺も同じやつ！」

やはり再会の酒は美味しく感じる。

話したい事は山ほどあるが、ここは少しアルコールで舌を滑らかにしようと俺は暫し飲みに徹する事にした——。

39、美酒爛々

時間が経つにつれ店に客が次々と入って来る。それに伴い、店内の雰囲気は賑わいはじめた。

最初は店内の雰囲気を感じた印象で見ていた俺。だが、賑わいとともに関心したものが支配しはじめると薄暗い感じの照明が実に程良い加減である事に気づく。

人の熱気は伝わりやすい。

ひとまず飲みを徹する俺達もその熱気に不思議と影響を受けたかもしれない。何故なら、つまみとともに追加の酒を受け取った俺達は、それを一気に飲み干し早くも三杯目の注文をしていたのだからニコチンとアルコールの絶妙なコラボレーションが疲れた体に染み渡る。

これほどの幸せがあるのか？

そう思うほど今宵の酒は格別だった……。

「そう言えば大樹、お前の彼女って家庭教師のバイトしてた時の教え子だったっけ？ よく考えてみると俺が上京した後の話だから、俺会った事なかったよな？」

そう言っただけで唐揚げを頼張りグラスを傾ける緒方。店は客の入りで賑わいつつも紫煙漂う俺達の周りには誰一人いなかった。

「そうだな、まだ紹介してなかった。んじゃ、今度帰省した時にも紹介するよ」

「おお、そうしてくれ」

取り留めもない会話。つっこんだ話は控え、とりあえず美酒に酔いしれようとグラスを空ける。

暖かいところで煙草と酒を堪能する。たったそれだけの事が今の俺達にとっては最高の癒しになっていた。

そこに俺の浮気話を持ち込むのは下世話だ。他にも話のネタがあ

るのだから、わざわざ酒を不味くする事はない。

まったりムードを漂わせながら飲む酒に舌鼓を打つ。

アルコールで喉を潤し美味なつまみで小腹を満たす。そして、ニコチンで気分を良くしていく。

「……お前とこうして飲むのも久しぶりだな」

顔に赤みがかったっている緒方。ジョッキ片手にいい感じになっている。まだロレツが回っているが程良く酔いが回りはじめているのが見て取れた。

「そうだなあ、就職してから飲みに行く機会がなかなか取れなかったからな。会ってもメシ食ってチャラつと喋って終了だったもん」

緒方は長期休暇の時は必ず帰省するのでは毎年会っている。だが、互いの休みが合わないので会っても飲みに行く事はほとんどなかった。

学生の頃は事ある事に飲みに行っていたのに。

久しぶりの再会の上に久しぶりのサシ飲みだからか、今宵の酒はいつもより進む。酒自体も美味しいのだろうが、やはり気持ち的な面が酒を格別の味に仕立て上げているのだろう。そのせいか、いつもはスローペースの俺も今日はやけにペースが良かった。

しかも酔いは回っても悪酔いしない。普段はあまり強い方じゃない俺だったが緒方と同じペースで次々と飲み干し、気が付けばもう六杯目に突入する有り様だった。

やっぱり気の許せる友との酒が一番旨い。

そんな訳のわからない事を思いながら、俺達はひたすら酒を流し込み紫煙を撒き散らしては夕チの悪い酔っぱらい親父と化していた――。

40、仕切り直し

テンションはうなぎ登りだ、鮭の川上りだ、鯉のぼりだ、狼煙を上げる。

……よくわからんな。

とにかく、自分でもわからなくなるほどテンションが上がっている。酔っぱらいの完成である事に間違いはない。

酔ってグダグダになるよりは、悪酔いしてる方がまだマシだろう。いい年した大人がグチグチしてるのは見てて情けなくなるから。

自制心無くした俺達は勢いのままに注文を繰り返し、ある意味歯止めの利かない状態になっていた……。

紫煙という名の煙幕を張り、誰一人近づけない装いを呈する。嫌煙者のヒンシュクを買いまくる俺達のテリトリーにはいまだに客が寄りつかないでいる。

気分は上々、ぶっちゃける環境も整っている……すべてのお膳立ては揃っていた。

「——じゃあ、いい感じになってきたところで、ぶっちゃけタイムと行かれますか」

もう何杯目かもわからないチューハイを片手に俺は、煙草に火を点ける緒方の方に体を向けて一声上げた。

緒方は雷神の絵柄が入った愛用のジツポを弄びながら紫煙くゆらせ俺の方を一瞥する。

他にも話題があるだろうに。そう言いたげな視線を浴びせつつも何も言わず酒を口にして耳を傾けた。

「やっぱ話しとかないといけないと思うんだわ。なんつうの、このモヤモヤした状態で語り合ってもテンションが上がり切らないっていうの？ 久しぶりの再会だからさ、腹割って話したいわけよ」

俺は敢えてこの過ちを話す事で今の自分を伝えようと思った。平々凡々、在り来たりな話をしたところで盛り上がるわけじゃないし、かといって海月とのノロケ話をしようものならせつかく盛り上がりそうなの場が壊れかねない。

それに他人の失敗談ほど学ぶべきところもあるし、また今回の浮気は実に俺らしい展開になってしまったから笑いのネタにもなる。まあ、あまり笑わないでほしいがね。

「——んでは、本題に入ろう」

俺は手にしたチューハイを一気に空け、煙草に火を点けると漂う煙とともに深呼吸をひとつして話を切り出した。

「まあ、なんだ。久々に女に会ったんだわ。懐かしさも手伝ったのだろうなあ、自然と昔の雰囲気になって……後はベタな展開に一直線ってわけよ——あつ、レモンチューハイひとつお願いね！」

店員の姿を捉えた俺は空のグラスを上げて酒の追加を頼む。

「……わりわりい。んでもって話の続きなんだが、その後はベタベタな展開で女の部屋にお邪魔して待ち合わせまでグダグダ絡んでたってやつよ……いったい何しに来たんだって自分に突っ込みたくなる様な再会になっちゃってな、それがちよつと胸に引っかかってるってトコなんだわ」

これまでの経緯を簡単に伝え緒方の反応を見る。

黙って聞いていた緒方は、話し終えた俺に向かって何度か頷いてみせると煙草を揉み消す。

「——そりゃ、浮気とまでは言わないんじゃないか？ 懇ろになつたのは事実だろうがただの成り行きだろ？ そんなに深刻に悩むほどのもんじゃないな。まあ、確かに彼女に言える話じゃないけどよ、男と女が会えば大抵はそんな風になっちゃうって」

そう言つと緒方は半ば呆れ気味な表情で肩を竦めた。

「……それでいいのか？」

適当とも取れる言葉に俺は思わず問い返す。

「いいんだよ、男女の関係なんて所詮そんなもんだ。綺麗に事が

運ぶわけないだろう……夢見がちなガキじゃあるまいし」

投げやりな口調で言い切った緒方は煙草を取り出し火を点ける。

そう言われてみると納得できるところがある。男女が二人でオールすれば、トラウマでも持つてない限り同じ展開になるだろう。しかも互いに悪い気がしないとしたら尚更だ。

もしそういう関係が嫌なら、はじめからオールしなければ良いのだ。

そう思うと緒方の言葉に説得力を感じる。

「……ごもつとも。仰る通りだな。なっちまったものは仕方無いしな……悪かったな、下らん事言っちゃまって」

いちいち言うほどのものでもなかった。確かに言った事で気が楽になったが、こういった席でわざわざ議題に上げる事でもない。

「ああ、別に気にするな。これで大樹の気分も晴れた事だろうし、夜はこれからなんだ。気を取り直して乾杯しようぜ」

緒方はそう言う空になったグラスを上げて店員を呼んだ。そして、再び乾杯の音頭を取り醒めかけたテンションを盛り返す。

今思えば、いつもの様に割り切る事ができないのも、懐かしさや旅の新鮮さのせいで少し考え過ぎてたのかもしれない。

いつもの俺に帰ろう。

俺は狂いかけた調子を取り戻そうとグラスを傾け酒を流し込んだ――。

41、二日酔い

——旅に出て、一人になった事で少し弱気になったのだろう。慣れ親しんだ友との会話でそれに気づいた。

今にして思えば、知加子の変化はたいしたものでは無く、ごく自然なものだといえる。俺の方が態度や雰囲気さがぎこちなかったんだと。

だから、いつもの俺と違って流されるままモヤモヤ感が残る事になったんだ。

疲れが溜まった状態で旅をしたのがそもそもの間違いだったのかもしれない。

そう思うと知加子に変な気を使わせてしまったんだと妙な後悔を感じてしまう。

……頭が割れそうなくらい痛む。勢いに乗って飲み過ぎたせいだ。あれから緒方の部屋になだれ込み、宅飲みに突入した酔っぱらい二人。

酔いに任せて夜通し積もる話に花を咲かせ、気がつけば明け方になっていた。

カーテンの隙間から薄日が差し、二日酔い特有の不快感の中、目を覚ます。雑魚寝したから体の節々は悲鳴を上げ、疲労感が全身にのしかかる。

「……は、吐きそう」

死んだ様に眠る緒方を横目に俺はフラフラと立ち上がる。そして、重い足取りで洗面所に向かう。

たった数歩の距離が果てしなく遠くに感じ、行き倒れにでもなる

んじゃないかと本気で不安になる。それくらい今の俺のダメージは深かった。

しばらく酒は断とう。俺はそう心に誓い、冷たい水で顔を洗った……。

「——死にそうんだ。昨日は飲み過ぎたな……」

開口一番、緒方はそう言うのコップに入った水を一気に呷る。

「……俺はしばらく酒を断つよ……」

俺も力無く頷き水を飲む。

飲んだ後の水は格別だ。

さすがにこんな時は煙草を吸う気にもなれないので俺達はひたすら水を飲んで床に寝そべる。

ここにいられるのも今日しかないのに、気力・体力ともに回復するまで時間が掛かりそうだ。

何やってんだか……気だるい空気の中、俺は溜め息を漏らす。だが、緒方と飲んだ事に対してのものではない。このふがない体に情けなさを感じたからだ。

年には勝てない。まざまざと見せつけられた様な気がして少し切なくなつたのだ。

……ゴロゴロと寝そべり、テレビを見ながら回復に専念する。体力の消耗が気力を萎えさせているので、俺達は取り立てて何かをするわけも無く安静にしていた。

夜になれば回復だろう。

そんな思惑があつたので俺達はテレビ番組の内容に軽いつつこみを入れたり、これからの予定や正月休みの話をしながら時間を潰す。

——特別なイベントがなくなるとも、ただだらけていても楽しめる関係。そんな俺達だからこそ、こんな時間の浪費とも取れる無駄な事ができるのだった。

42、最後までノリノリの俺達

——ヒロキは復活しました。

——オガタは復活しました。

某ゲームの教会で復活したかの様に立ち上がった俺達。元氣ハツラツ、やる気ゲーシ“ピンク”といった感じである。

さすがにまだ体にだるさは残ってはいたものの、行動に出るだけの氣力と体力は回復していた。

「——大樹、さすがに今日は飲まんذار？　メシでも食いに行くか、それともウチでまったりするか。どうする？」

煙草をくわえながら緒方は指を鳴らす。そして、首を捻ったり腕を回したりと固くなった体を解した。こういうところに年齢というものを感じてしまう。

一通り終わると煙緒方は草に火を点け、ゆっくりと深呼吸する様に煙を吸い込む。

「……うゝん、さすがに今日は飲みたくないな。明日は朝早いし、今日は部屋でまったりトークでもすっぺ」

俺も軽くストレッチをしながら答える。

完全におじさんだなあ。見事なおじさんっぷりに顔を見合わせる
と苦笑を漏らす。

これを海月が見たらまた何か言われそうだ。俺はこの場にいない
海月を思うと自然と笑みがこぼれた。

——短い様で長かった様な今回の旅。

この旅ももうすぐ終わる。明日になれば地元に戻り、年末商戦に

出陣しなければならぬ。

忙殺される日々が始まると思うと少し肩が重くなる。しかし、いろいろあったが知加子や緒方と再会した事で気分はリフレッシュできた。

今宵が最後だ。バカ話に花を咲かせるとしよう。

俺は煙草を取り出すとテーブルでフィルター部分を軽く叩き葉っぱを詰める。こうする事で味をまろやかにするのだ。

「いいね。じゃあ、後で買い出しに行こう」

そう言う時緒方は灰皿に煙草の灰を落とし、短くなった煙草を再び口にくわえる。俺も十分に煙草の葉を詰めると火を点ける。

「よし、善は急げだ。一服したら買い出しに行こうぜ」

煙を肺に入れ、ゆっくりと吐き出す。

約半日ぶりのニコチンに頭が少しクラクラした。

急激にニコチンを摂取したからだろうか。それとも酔いがまだ体に残っているのか。

どちらにしろ、すぐに慣れるから気にする事はないな。頭をフラつかせながらも俺は半日ぶりの喫煙を満喫する事にした。

「――結局、飲みかよ……」

コンビニに買い出しに行った俺達。晩メシを買ったつもりが何故かおつまみコーナーで物色していた。

昨日の飲みでだいぶ体がだるくなっていた事から、軽く腹を満たす程度でいいや、と思ったのが間違いの始まりだ。

ちよつと小腹が空いた程度、という事は食べるものを限定してしまふ。そして、軽く食べられるものなどつまみしか思い浮かばない。今更にお菓子で腹を満たすなどとは思わないし……。

故に俺達はおつまみコーナーで小腹を満たす食材を購入、さらにそれに見合う飲み物……やはり酒しかない。

結局、俺達は酒とおつまみを買って部屋に戻るはめになった――。

「俺達つてバカだよな」

買い物袋をテーブルに置いて俺は苦笑いを漏らす。緒方も呆れた表情を浮かべ自嘲気味に頷く。

「まっただ」

とりあえず酒を一本ずつ出して残りを冷蔵庫に入れる。それからつまみをテーブルに並べ、酒宴前の一服を嗜む。

ノリで買い出しに行つてはいかな。俺は目の前の光景に明日朝早く起きれるのか不安になり、勢いに任せてはいけないな、と少しだけ反省した。

——東京にいられるのも今夜限りだ。次はいつ来れるのか、まるで見当もつかない。

それなのに飲み倒れで最終日を終えてしまう自分にちよつと呆れてしまう。でも、最後の晚餐を緒方と面白おかしく過ごすのも悪くないとも思う。

話のネタとしては間抜けてて面白い。

海月なら、このネタで十分笑ってくれるはず。きっと聞いたら腹を抱えて笑ってくれるだろう。二人の笑いのツボは似ているから。そう思うとなんだかこれでいい様な気がしてきた。

明日は早い。飲み過ぎにだけ注意しよう。

「……じゃあ、乾杯するか」

吸いかけの煙草を灰皿に置くと緒方は缶ビールを片手に持った。

「おう」

俺もそれに合わせる。

「——よし。じゃあ、最後の夜に乾杯！」

「乾杯！」

俺達は缶ビールを合わせ乾杯をする。

最後の晚餐の始まりだ。飲み過ぎにだけ気をつけて楽しく飲もう。……起きた時はしばらく飲むまいと思っていたのに、いざ飲んで

みると何故か美味しく感じられるから不思議だ。

俺達は、つまみと昔話を肴に最後の夜を満喫するべく勢いゆく缶を傾けた――。

43、善は急げ？急がば回れ！

冬の朝は寒い。

一昨日の影響から昨夜は飲む量をセーブ、緒方と思い出話に花を咲かせ最後の夜を有意義に過ごした。

それは、飲むよりも食べる方をメインにしたからに他ならない。もしこれで一昨日のテンションで飲んでいたら……俺はいまだに夢の中にいただろう。昨夜は頃合いを見て早めに切り上げたので、飲んだ翌日には目覚めの良い朝を迎える事ができた。

しかし、場所は違えどこの寒さは変わらない。冬だから寒いのは当然なのだが軟弱な身にはやはり堪えるものである。

身が引き締まる様な冷え込みがアルコール漬けになった頭を鮮明にしてくれる。だが、寒くて目が覚めるといのは慣れないものだ。このまま目覚めなかったらどうするんだ？

そんな意味の無い疑問が頭に浮かぶほど、俺は冬の朝が苦手だった……。

——目覚めの冷水で頭をスッキリさせ、舌が火傷しそうなほどホットなモーニングコーヒーで一日の始まりを迎える。

まだアルコール度数の高い体に煙草は禁物。さすがに目眩を起こしそうなので今朝に限って“目覚めの一服”は自主規制する。

ちよつと健康的だなあ、と自画自賛しつつ身支度を整え、出発の時を静かに待つ。

「……大樹、何時に出るんだ？」

俺とは対照的に目覚めの一服を嗜みながら程良い熱加減のカフェオレを口にする緒方。その姿からは昨日までの疲れは感じさせない。すごい回復力だ。

俺は顔色の良い緒方の姿に心底感心した。

昨夜はともかく、一昨日あれだけ飲んだ酒が残らないんだから。俺なんかいまだに尾を引いているというのに……。

きつと緒方はステータス『酒豪』でも持っているのだろうな。

「もしなんだったらバスントコまで見送るぞ。どうせ今日は暇だし」

緒方はそう言うと言覚めの一服を揉み消して立ち上がる。

「顔洗って来るわ」

これまた俺とは対照的に軽い足取りで洗面所へと消えて行った。

(……年、同じなのにな……)

緒方の後ろ姿に俺はちよつとした敗北感を味わった。

『これから帰る。部屋に着くのは夕方頃になると思う。ちゃんと土産も買ったしネタも揃えておいた。今日、時間があるなら夜来てくれ』

——送信、と。

我ながら実に味気ない文だなあ、と思いつつ海月にメールを送る。ここ数日連絡しなかったから、さぞかし心配している事だろう。

まあ、連絡できなかった事情もあったから、そこは勘弁してもらいたいものだ。

この埋め合わせは必ずするから。

俺は、心の中で海月に平謝りする。言わなければバレる事など万が一ないが、やはり後ろめたさからか良心が痛む。

海月の無邪気な笑顔を思い出すと尚更そう思えた……。

「——んじゃ、そろそろ行きますか」

体力も万全に近いくらい回復し、陽も出てなんぼか暖かくなった頃を見計らい俺達は部屋を出た。

帰りのバスは午前最後の便だ。この中途半端な時間帯はそんなに混まない。行きは空いてても帰りは混むから、一応その辺のところは計算して予約を入れておいたのだ。

都会の交通事情に疎い俺に代わって都営地下鉄のスペシャリストである緒方のナビで“より早く、より安く”目的地に向かう。

「――早いな」

想像よりも早くバスターミナルに着いてしまった俺達。

無論、俺が乗るバスはまだ来ていない。しかもその一本前のバスすら来ていなかった。

「ははは、ほら、善は急げって言うだろ？ ゆっくり待とうぜ」
待合い所のベンチに座り、缶コーヒーを口にしながら緒方はしれっと言いつつ放つ。

「いくらなんでも急ぎ過ぎだつてば……」

確かに出発の声を上げたのは俺ですよ。しかし、前もって到着時刻を予想しなかったのか？

俺は思わず緒方につっこみを入れたくなった。

「まあ、いつか。こうして緒方と無駄な時間を過ごすのも悪くない」

真心込めて皮肉を漏らす。なに、悪意のない感想ですよ。

目一杯皮肉の入った言葉でつっこみを入れ、俺もベンチに腰掛けた。

この言葉に一瞬だけバツの悪そうな表情を浮かべるも俺の心を読んだ緒方はすぐに顔を綻ばす。

いやはや、最後までネタには事欠かなかったなあ。

そう思うと俺は自然と声を出して笑っていた……。

44、内で虚しく外で凍える

バスターミナルに到着した俺達。しかし、場所を把握していなかった俺は出発時間を誤り、なおかつ緒方の迅速ナビにより予定の時刻よりも早く着いてしまった。

ちなみに一本前のバスすら来ていない。はつきり言って早すぎである……。

——バス乗降所は地下にある。といっても“バスターミナルビル”の中で地下というだけで実際はすぐ外は道路になっている。ただ単にビルの入り口が二階部分にあるからそうなったに過ぎない。

だが、その仕組みを知らなかった俺ははじめ案内を見て迷いそうになったりする。ここで迷子は恥ずかし過ぎる。

上は完全にオフィスの装いを呈している。一階に土産物の売店がいくつか並んでいたが、違和感ありまくりでとても買う気にはならない。周りは皆スーツ姿だから尚更だった。

地下はバス乗降所があるだけで売店の類は一切ない。しかも喫煙スペースも無く、こんなにならないと言わんばかりのジュースの自販機が所狭しと並んでいるだけのものだった。

ベンチで缶コーヒーを飲みながらひたすら待つ。

さすがに高速バスを利用する人しか来ないだけあって辺りは閑散としている。時折、従業員らしき人の姿がチラホラ見えるだけだ。

「——誰もいないなあ。ここはホントに東京か？　どれだけ閑散としてんだあ？」

あまりの暇さ加減に俺は悪意の無い愚痴をこぼす。

無論、緒方が悪いわけでは無い。無いのだが、愚痴をこぼさずにはいられない。

「大樹、そんなに愚痴るなって。たまにゃあ、こうやって黄昏る

のもいいだろ？ この忙しい人生の中で、こうしてゆつくりとした時間を過ごす機会なんて滅多に無い事だぞ？ もっとこう……大らかな気持ちになってだなあ——」

悪びれる様子も無く緒方は俺の愚痴をスルーして訳のわからない人生論を語り出す。俺はそれを受け流しベンチの背もたれに寄りかかり目を瞑った。

「……おい、聞いてんのか？」

言っててバカバカしくなってきたのか、緒方は困った様な口調で虚しさを露わにする。

「……大樹、まだまだ時間あるし外行って煙草吸うべ」

「そうだなあ、こうして黄昏んのも虚しいしな。ちよっくらモクりますかね」

そのナイスな提案を聞き入れ、俺達は飲み終えた缶コーヒーをゴミ箱に捨てて外で一服する事にした。

「——うう、やっぱり外は寒いな」

陽の光が一面を照らし、影を色濃くしているのにも関わらず外は冷える。

眩しい日差しに目を細め、寒さに身を縮こませる俺。このまま縮みっぱなしじゃ、煙草もロクに吸えないぞ。

バッドステータス『寒さ×』を所有している身としては、この寒さがやる気ゲージを著しく損ねる。

「確かに寒いな。こんなに天気いいのに、冷え方はハンパじゃないな……」

俺よりは寒いに強い緒方も体を揺すりながら同調した。

ここに来る時はあまり気にしていなかったが、今日の冷え込みは『寒さ×』の身には堪える。

早くバス来ないかなあ。

紫煙漂う煙草をくわえながら俺は進まぬ時の流れにため息を漏らした。

45、旅の終わり

緩やかな風が冬の色に彩りを添える。

降り注ぐ太陽の光さえもその色を染めかえす事が出来ず、冬將軍の静かなる猛威を許していた。

「——それにしてもさあ、今回はホント来てよかったと思うわ……」

携帯用灰皿に揉み消した煙草を入れて俺は誰に言うわけでもなく言葉を漏らした。

「……なんだ、改まって？」

緒方は吸いかけの煙草を揉み消しながら怪訝な表情で問い返す。

「いや、なんて言うか……いろいろ考える事あったなあ、って思ってたわけよ。今までさ、あんまり物事を深く考えてなかった、ってね……」

振り返ってみると俺は物事を短絡的に考えていたと思う。それに独りよがりな部分もあった、と。

今までは、独断と偏見を掲げ、独自の発想を大事にしてきた自分。しかし、それだけでは意志の疎通がうまくいかない事を痛感した。知加子は何を考え、何を思い俺と会ったのか。俺にはその心がまったく読めないでいる。つまり、知加子の身になって考えていなかったのだ。

緒方と再会してその事に気付いた。

行動や言動の裏側に秘められた思い。

緒方ならこう思っているだろう、と自然に理解できるのに知加子の思っている事が本当の意味で理解できなかった。

きつと寂しい思いをさせただろう。そう思うと心苦しかったが、今まで気付かなかったこの事を今回知れてよかったと思う。

何故なら、もし次に会う機会があったら、その時はきつとわかり

合えると思うから。

ほんの少しだけ、成長できたかな。そう思うと自然に笑みがこぼれた。

「……なんて言うの、またひとつ大人になったってやつかな……」
二本目の煙草に火を点けながら俺は緒方の肩を叩いた。

「訳わかんねえ……でも、やっと本来のお前らしくなってよかったよ」

そう言って緒方は笑みを浮かべる。

「——まあ、俺から言わせれば、大樹はまだまだ子供だと思っけどな。いや、まだまだ若い、の間違いだ。あはははっ——」

「あ、そうかもな」

その的を射たつつこみがおかしくて二人して声を立てて笑った……。

——手を振る緒方。窓からそれに応え、手を上げる俺。

待ちわびたバスが到着したのは、あれから二時間後の事だった。

やはり年のせいか、長時間冬空の下に居られなかった俺達はすぐに待合い所に戻り缶コーヒーで暖をとった。

それから俺達はいつもの様に他愛もないネタで盛り上がり、ちょっとした漫才を繰り広げたりしてバスが来るまでの時間を過ごす。

あれだけ退屈だったのが嘘の様に時は過ぎ、今こうしてバスの座席に腰を下ろしている。

——オフィス街の高層ビル。忙しなく道行く人々。混雑する道路車内にいると日差しが暑く感じられる。窓越しにゆっくりと流れる景色を眺めながら長い様で短かった日々を思う。

進むにつれ景色の移り変わりが早くなっていき、それが旅の終焉を引き立たせる。

(……これから忙しくなるなあ……)

明日からまた仕事だ。年末に向けて激闘の日々が始まる。それこそ、年明けまで休み返上で働き詰めのバトルに臨むのだ。しかし、今回の旅はいろいろあったが良いリフレッシュ休暇になったと思う。故に年末年始の激闘もなんとかこなせるだろう……。

『今バスで高速に乗ったよ。夜には部屋に着くと思う。明日から年末商戦だ！だが、良いリフレッシュ休暇となった今回の旅は俺の心に元気をくれた。これから年明けまであまり会えなくなるけど、お互いに頑張っていこーな！んじゃ、また連絡するわ』

高速道路に乗った俺は海月にメールを送った。相変わらずよくわからない文章だなあ、と思いつつ俺らしくていいやと細く笑む。あと5時間もすれば家に着く。今日はゆっくり休んで明日に備えよう。

いや、待てよ。

きっと海月が家に来る。今日は休めそうにないかもしれない。それでもいいか。今のうちに休んでおけば問題ないだろう……。

「——本日は、東北特急バス、ムラマサ号にご乗車いただきまして、まこと、ありがとうございます……」

思わず拍子抜けしそうになるアナウンスに目覚める。

グッスリ爆睡モードで気分爽快・体力も回復した俺は、伸びをして固くなった体をほぐし到着まで見慣れた街の景色をボンヤリと眺めた。

東京とは比べものにならないが、ここの渋滞もかなり精神的にくる。しかし、それも今はあまり気にならなかった。

——ネオンの明かりが夕暮れの街を彩り、行き交う人の群れが賑わいを与える。

寒空の下、夜の訪れを感じながら俺は煙草をくわえ身を縮め歩く。

早く海月に会いたいな。もうすぐ家に着くと思うと何故か無性に海月に会いたくなった。

はやる心が俺の背中を押す。だからなのか、足取りも軽く気分も良い。

今夜は緒方とのバカ話で盛り上がりうかな。そんな事を考えながら俺は家路に着いた……。

——旅は、自分を見つめ直す機会を与えてくれるもの。

見慣れぬ景色、見知らぬ人々、そして懐かしき面々……そのすべてが物言わず自分に“何か”を問いかける。

形はどうあれ、旅はどこか心を癒してくれる——。

45、旅の終わり（後書き）

最後までお付き合い下さってありがとうございました。――（ ）
また別の作品でお会いできたら幸いです。♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3966a/>

トラベル・トラブル

2010年12月1日12時11分発行